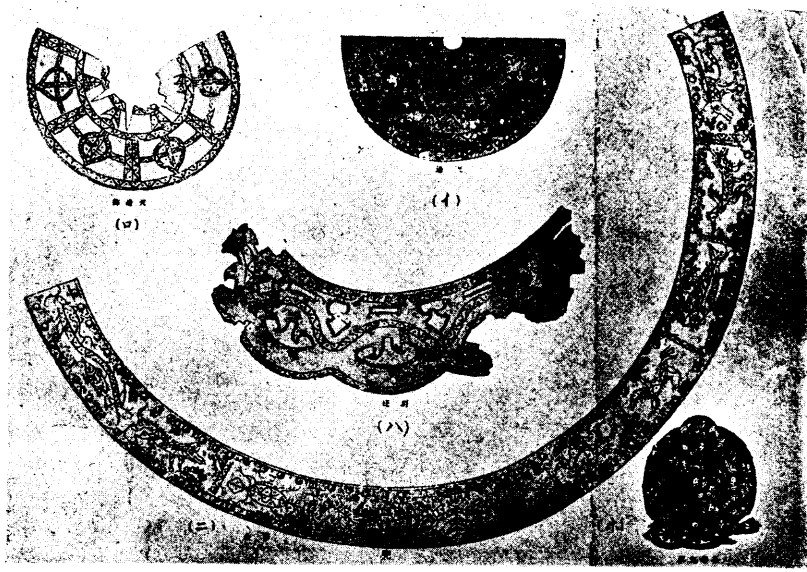
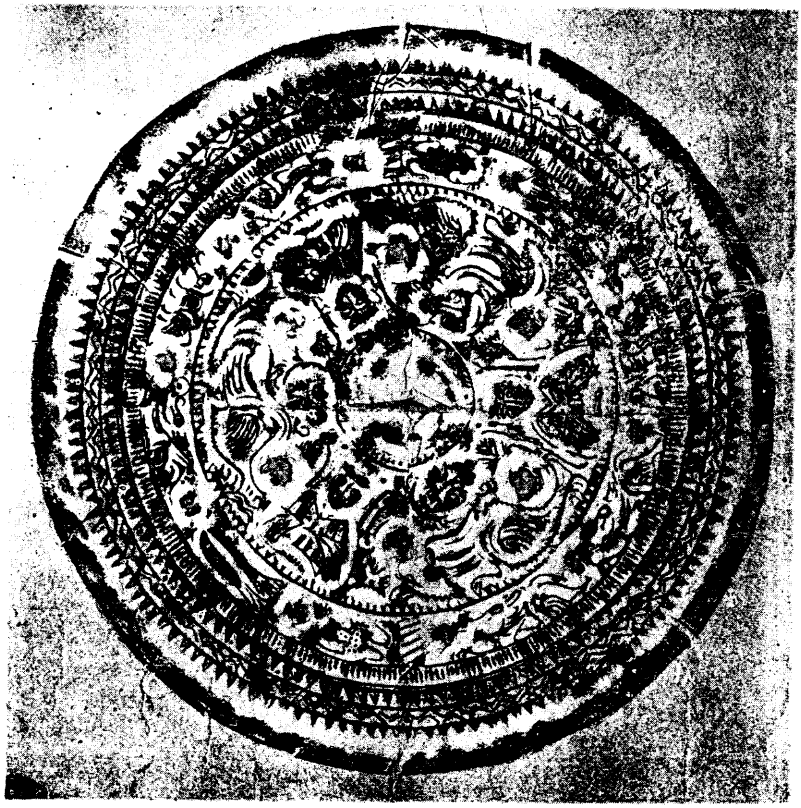
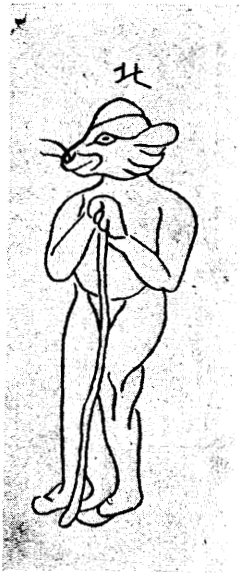
第一圖　上總國君津郡清川村字祇園山林内古墳ヨリ發掘シタル兜ニアル獸帶　東京帝室博物館藏（模様集成所載）

（イ）天邊　（ロ）天邊飾　（ハ）星庇　（ニ）帽金　（ホ）金形飾



第二圖　尾張國東春日井郡不二村大字出川發掘　東京帝室博物館所藏





第三圖
元明雀人石

第四圖
新羅角千墓十二神像（其の一）

東京帝國大學附屬圖書館

希臘宗教に於ける男性神と女性神との關係

（ゼウスを中心として）

松村武雄

希臘多神教の中樞的存在たるゼウスは、その內性と職能との多樣に於て、及び他の神々との血緣的關係の複雜に於て、オリムポス諸神中の隨一に位す。而してゼウスをしてかくの如くならしめたる素因は略ぼ三個に包括し得べし。

その一は、諸民族の宗教及び神話に共通する素因にして、卽ち民衆の文化が進展するに從ひて、その宗教感情及び思想が複雜化し、而して這般の複雜化が、諸民族の多神教の主宰神の表象に特に强く反映する傾向これなり。

その二は、希臘民族に固有なるか、若くは希臘民族に特に强烈なる素因にして、卽ち、

(I) 希臘民族の宗教は、神々を anthropomorphise する力殊に强烈なりしこと。

(2) 希臘民族は太しく蕪雜粗野なる形象を厭うて、これを醇雅純一なる姿に昇華することに熱意せしこと。

(3) 希臘民族の宗教は異常なる particularism の色調を有し、而してそれが次第に universalism へと進展せしこと。

(4) 古典時代に於ける希臘民族の外國神に對する態度が頗る寛大なりしこと。

これなり。

その三は、ゼウスに固有なる素因にして、即ち

(1) ゼウスの崇拜が、北方民族によつて、彼等の南方への移住、征服、政治的結合を通じて持ち運ばれたること。

(2) 北方民族が勢威を得ると共に、ゼウスが次第にその存在を高調せられて、希臘多神教に於ける諸神の首領となりしこと。

これ等の諸因子は相依りて、ゼウスの内性職能及び神々との血縁に下の如き多樣なる形相を生せしめたり。

(1) 生氣説的信仰はゼウスを一の animate sky とし、又は雨そのもの、雷そのものゝうちに

ゼウスを觀せしめ、動物崇拜の心理は、驚としてのゼウスを生む。

(2) 生氣的信仰より神人同格的信仰への進展は、animate sky としてのゼウスを人格的なる天空神に變せしめ、而して天空は雷霆風雨の生起するところたり、はた雨は河海と大地とに降り行くものなるがために、天空神としてのゼウスの職能は次第に複雜化して、雷霆神、風雨神、河海神、大地神をも兼ぬるに至る。(このことについては、Folk-lore 誌上に於けるクック氏の『歐羅巴の天空神』を參照すべし。)

(3) 北方民族はその移住中に、多くの地方的宗教及び神話に逢著せり。而して彼等は征服、壓迫、結婚懷柔若くは統一政策によつて、おのれ等の主要神ゼウスをして、これ等の地方的宗教神話を包攝せしめ若くは地方神と血緣を結ばしむ。

(4) 被征服民族は、自己の宗教の存續を要求するために、若くは自己の宗教に對する信念を挫かれたるために、自ら進んで、おのれ等の神々とゼウスとの間に或る血緣を定結し、若しくはその內性と職能とをゼウスに推行せしむ。

(5) 自然神若くは職能神より道德神への進展の種々形が殊に著しくゼウスの上に顯現す。

(6) 神々の形象を純化せんとする努力の種々相が殊に著しくゼウスに纏繞す。

(7) 外國の宗教に對して大なる寛容を持ちし希臘民族は、外來神を自國の神々と同化せしこと多し。而してこの傾向は當然彼等の多神教の頭目たるゼウスに於て最も強く生起せり。

ゼウスを中心とするこれ等の多種多樣なる宗教的變轉につきては、吾人は既に『ゼウスの文化史的研究』及び『古代希臘の文化に現れたる神々の葛藤の研究』に於て詳かに考察を下したり。而して吾人が該研究以外新たに當面の問題とするところの『ゼウスと希臘女神との關係』も亦這般の宗教的變轉の一個の現れなるが如し、今その一二につきて考察を下すことゝせん。

第一　ゼウスとアテナとの關係

アテナの崇拜は極めて古くより希臘の各地に擴布せり。この女神の宗儀がいかに普遍的なりしかは、ホメロスの詩篇、地方的宗儀の記錄、及び多くの傳說の實證するところなり。而してこの事實は、同女神が殆んど奇異なる程濃厚なる Hellenic character を帶びたる事實と相呼應して、彼の女がアフロディテの如く東洋より將來せられたる神にあらずして、希臘固有の神なることを語る。然らばアテナの本質は果して何ものなるか。

思ふにオリムポス諸神のうちにて、最も醇化せられ、最も高華なる宗教的表象を有するものを求むれば、アポロンを除きては、アテナを以てその第一人者となすべし。固よりアテナの宗教に現れたる倫理的觀想は、ゼウスの宗教に含まれたるそれの如く進展し高貴化せるものにはあらず、然れども彼の女の宗教的表象に至つては、到底ゼウスのそれの追隨を許さざる程度に粗野と蠻氣とより解放せられたり。彼の女の祭儀は Zeus Lykeios のそれの如き野蠻陰慘な色調若くはディオニソスのそれの如き orgiastic な狂噪動亂より全く自由に、彼の女の內性は、頗る高度に藝術的化せられ智力化せられたり。されば彼の女の宗儀と神話とを通じて、その根原的性格を把握するは頗る難事ならずんばあらず。

この故にアテナの本質の解釋は、宗教神話學徒の間にあつて、太だ區々なり。あるものは同女神を目して大氣となし、(Welcker, Griechische Götterlehre, I. p. 300) あるものはこれを解して、あらしと雷火との人格化となし、(Roscher, Ausführlicher Lexikon, S. Athena) あるものはこれを薄明(トワイライト)となし、(Ploix, La Nature des dieux, p. 213) 更にあるものはこれを水神となす。しかれどもその論據とするところ盡く薄弱にして且つ矛盾に滿ち、到底吾人の首肯を得ること能はず。蓋しこの女神は古くより civilised せられ intellectualised せられたるが故に、有史時代

の實際の宗儀若くは文獻を介して、彼の女のうちに潜む physical element を剔抉せんとするは、決して容易のことにあらず。

しかれどもアテナの內性と職能——高度に人文化し智力化し政治化したる彼の女の內性と職能との間にあつて、これと著しく諧調を缺く如く思惟せらるゝ二個の要素の存するは、拒むべからざる事實なり。二つの要素とは何ぞや。曰くアテナが農作物と密接なる關係を有すること、及び戰鬪を司ることこれなり。

アテナと農業との關係は、先づ Aglauros 及び Pandrosos の稱呼が彼の女に附著せるによつて伺はる。またパウサニアスがその紀行卷一に記せる雅典の古祭儀を見れば、頗る神祕なる方法によつて大地が產みしものをアテナに獻げたるを知るべく、更にハルポクラチオンが示せる一の祭儀上の律則によれば、アテナと大地女神パンドラとの間に頗る密接なる關係の存せること明かなり。(Philoch., Frag., 32) 雅典に於ける古き祭典 Procharisteria, Oschophoria, 及び Plynteria も亦、アッチカ地方の原始的農業生活がアテナの保護管掌の下にありしことを示す。更にまたアテナ崇拜は、さまざまの點に於て、大地女神デメテル及び生成神ディオニソスの崇拜と深き交涉を有するを見る。見よ、アテナの Plynteria 祭禮には、egeteria と稱する儀

式あり、街路を通して一聯の無花果を持ち運ぶことによつて、デメテルがフイタロスに與へたる賜物卽ち無花果の栽培がアテナと不可分離の關係あることを示すにあらずや。また見よ、フアレロンの地なる Athena Skiras の崇拜に於ては、アテナエウスが、

『アリトデモス我等に告げていふ、スキラ祭には、雅典に於ける青年たちの競走行はれぬ。青年たちはその手に果實をつけたる葡萄の小枝を携へて走る。而してそのコースはデイオニソスの神殿よりアテナ・スキラスの神殿までなりき。』

と言へる如く、葡萄の果實を媒體として、アテナとデイオニソスとが握手せるにあらずや。デイオニソスが宗儀上常春藤樹と深き關係を有し、また多くの詩人によつても屢〻"ivy-haired"と呼ばれたることは、人のよく知るところなると同時に、アテナもまたエピダウロスなるアクロポリスに於て"ivy-Athena"と稱せられたる事實の存するを思へば、アテナが生成神としてのデイオニソスと殆んど同一の職能を有せしことといよいよ明白となり來るを覺ゆ。(Pausanias, I. 31, 29; Homeric Hymns, XXVI, 1; Pindaros, Frag.,53 等參照) 就中最も注目すべきは冬の末穀穗の生ひ立ちそむるとき、雅典なるすべての役人が、アテナに犧牲を獻ぐるといふ Suidas の記述にして、こは最もよくアテナの農業的性格を示唆するものと言はざるを得ず。

註

(1) アテナを目して大地女神となすは、先人にも亦これあり。Heraklide の如きこれなり。(Herk., Alleg Hom., p. 444)

(2) また現代にあつても、T. Keightley 氏の如きは、

『アテナを目して大地となす假定說を許容するときは、一層容易に解明し得らるゝ若干の神話あり。』(T. Keightley, Classic Mythology, p. 142)

と言へり。

次にアテナが一面に於て偉大なる戰鬪神たることは、ホメロスの詩篇これを語りて餘蘊なし。また Homeric religion を外にしても、希臘諸地の民間宗教が、軍神としてのアテナに關して、頗る豐富なる證徵を提供するを見る。Ithionian Athena は、戰鬪に臨める際のセッサリア人の watch-word たり、(Paus., X. 1)『勝利神アテナ』の名は廣く諸地方の民衆に膾炙し、(Harpokration and Suidas, S. V. Nike Athena; Sophokles, Philoktetes, 134) ブラタエアには Warlike Athena の神殿あり、(Frazer, Pausanias, II. p. 39) 雅典及びペルガモスにもまた Warlike Athena ありて、他の戰鬪神アレスと共に大に崇拜せられたり。(Paus., I. 28 及びフレーザー氏引用の Fränkel. Inscription, I. No. 13 等參照)

思ふに多くの民族の多神教にあつて戰鬪のことを管掌するものは女性神にあらずして、男性神なり。印度吠陀宗教に於けるインドラ、希臘神話に於けるアレス、北歐宗教に於けるオーデ

イン及びチル、羅馬宗教に於けるマルスの如きみなこれなり。然れどもこはみな父系主義の民族に於ける戰鬪神なり。之に對して母系主義の民族に於ける原始的宗教にあつては、戰鬪のことを司るものは、多くは大地女神若くは大地女神より進展せる大母女神なるを見出す。

蓋し父系主義の民族の宗教神話に現るゝ女神と、母系主義の民族のそれに現るゝ女神とは、その性情職能等に於て大なる差異あり。前者に於ける女性神が、その威力に於て、またその地位に於て、殆んど常に男性神に對して副次的なるに反し、後者に於ける女性神就中大地女神は、宇宙に於ける根本生命若しくは生成的第一原理として、男性神以上に威力ある一個の Controlling spirit たること多し。從つてこれ等の女性神は、父系主義の民族が有する女性神と異つて、頗る剛猛なる性情を有するを常とす。バビロニアに見出されたるかの "Creation Tablets" を讀めるものは、チアマットが一個の大母神として、夫君アプスより遙に大なる威力と剛猛の氣とを有するに駭心するならん。またクリートの大地女神も戰鬪を掌る勇猛神として、兩刃の斧をその象徵とし、他の男性諸神の上に威壓的勢力を有し、ひたすら破壞の力の自己の掌中に存するに愉悅せり。ある古代詩が、

Looking over wasted lands,

Blight and famine, plague and earthquake, roaring deeps and fiery sands,
Clanging fights, and flaming towns, and sinking ships and praying hands.

(D. A. Mackenzie, Myths of Crete and Pre-Hellenic Europe. p. 60)

と歌へる、以て彼の女の剛悍にして好戰的なる風貌を窺ふことを得べし。リビアの大地女神 Neith も亦偉大なる司配的靈格にして、雷火を以てその Attribute の一となし、戰鬪神として弓箭を手にす。埃及の大母女神 Sekhet-hathor も一の大なる破壞者にして、その原始的形象に於ては、右手に鞘を拂へる短劍を握り、更に後代に至つて、埃及のあらゆる女神を人格化したる Isis-Hathor に進展しても、一の Philae Text はその性情を描いて、

"Terrible is she as Sekhet."

(A. Wiedermann, Religion of the Ancient Egyptians, p. 138)

となせるを見る、而してこれ等はみな母系主義の所產たり。更に英國の民間宗教に現るゝ Black Annie は寂寞の地を領して四隣の恐怖するところとなり、牧羊者は羊の喪失を、村婦は兒女の亡失を、齊しく彼の女の行爲となす。ある村詩人の詩はよくその獰猛の氣を表す。曰く、

'T is said the soul of mortal man recoiled

To view Black Annis' eye, so fierce and wild
Vast talons, foul with human flesh, there grew
In place of hands, and features, livid blue
Glar'd in her visage; whilst the obscene waist
Warm skins of human victims close embraced.

(C. J. Billson, Country Folk-lore, Vol. I, p. 125)

またBlack Annie に酷似せる女魔に Yellow Muilearteach あり、ゲール族の傳說に著名なる存在態にして、民間詩の告ぐるところによれば、

Her face was blue black of the lustre of Coal,
And her bone-tufted tooth was like red rust.
In her head was one deep pool-like eye
Swifter than a star in a wintry sky.

(Campbell, West Highland Tales, Vol. III, p. 138)

と。以てその蠻氣と凄氣との一斑を窺ふに足るべし。而してこれ等の二個の女怪は既に怪魔に

轉身せりと雖も、その本原的性格にあつては共に母系主義より生れし大地女神なりしこと、マッケンジー氏の研究によつて明白なり。

然るに希臘に於てもアテナはその性能に於て顯著なる程度に大地女神たり、同時に女神にして偉大なる戰鬪神たる面目を備ふること上述の如し。

かくして吾人はアテナがその本質に於て女系主義の大地女神にあらざるかを疑ふものなり而してこの見解に可なりの蓋然性を與ふる一事あり。そは希臘の多くの古文獻がアテナとNeithとを同一神と認めしことこれなり。Neithは、先に言へる如く埃及の女系主義が產み出したる一大女神にして、その本質は大地女神たると同時に戰鬪神たりき。而して、ヘロドトスが、プラトンが、またヘシキオスが悉くこれをアテナと同一視したるより考ふれば、アテナの本原的性格が那邊に存したるかは、略ぼ推知し得るにあらざるか。(Herodotos, II, 59; Platon, Timaeus, p. 21; Hesychios, S. V. Neith)

註

(1) Neithがアテナと同一視せられたる一證としては、フレーザー氏が指摘せる如く、同女神がアテナの如く、右手に梟を持ち、左手に投槍を握る姿が、Saitic districtの貨幣に表現せられたることを擧ぐるを得べし。尙このことにつきては、Wiedermann, Die Religion der Alten Agypter, p. 77 ff.; Brugsch, Religion und Mythologie der Alten Aegypter, pp. 338-354; Tiele, History of the Egyptian Religion, p. 202 ff. 等參照。

(2) 古き希臘に母系主義の行はれしことは、フレーザーの Golden Bough にくはし。

もしアテナにしてその本原的性質に於て、女系主義より生れたる女神なりとすれば、オリムポスの主宰神ゼウスと何等かの形式に於て交渉を生ぜざるを得ず。

思ふに父系主義と母系主義との交渉は、文化史上大に注目すべき問題の一ならざる可らず。移住、殖民、侵入等さまざまの民族的運動によつて、一の父系主義の民族が一の母系主義の民族と相接觸するとき、若くは同一民族にあつても、それが母系主義より父系主義に變轉するときは、多くの場合その間に複雜なる文化的旋渦を生み出す。蓋し宇宙と人生とに關して male origin を信奉するものと female origin を信奉するものとは、その家族制度、社會制度に於て、その宗教組織に於て、またその道德律に於て、さまざまの顯著なる差異を有するが故に、かゝる民族が相接觸するか、若くは母系主義の神の崇拜が父系主義の宗教圈に入り來るや、これ等の差異は、或は混糅し、或は反撥し、或は融合して、頗る錯綜せる社會的及び宗教的現象を迫出し來るものなればなり。而してこれを希臘の宗教に照すとき、女神アフロデイテに、這般の現象の一面の現れを見出す。

アフロデイテは疑もなく母系主義的なセミチック族が產み出した Astarte (Jshtar, Attar,

Athare, Atargatis-Derceto) を原體とする女神なり。而してアスタルテが母系主義の大地女神として、濃厚な戰鬪的性格を有せし如く、アフロデイテの身邊にも、可なり鮮明な warlike aspect が纏繞せしを見る。

希臘の多くの地方に武裝せるアフロデイテ存せり。卽ちコリンスにありては

『アルコ・コリンスの頂にアフロデイテの神殿あり。その像は武裝した女神に表現せらる。』(Paus., II. 5)

と言はれ、スパルタに於ては、

『小丘の上に古き祠殿あり。武裝せるアフロデイテの木像を有す。』(Paus., III. 15)

と言はれ、更にキテラに於ても、

『希臘のあらゆるアフロデイテ聖祠のうちにて、この祠最も古し。女神は武裝せる木像によつて表はさる。』(Paus., III. 23)

と言はる。

武裝せるアフロデイテは元來フイニキアより渡來せるものなるが、希臘に入りても、その初期に於ける崇拜は、『愛の女神』としてにあらずして、戰鬪神としてなりし形跡あり。この女神

がヘラスの世界に渡來して始めて足をつけしところはキプロスなりと傳へらる。而して同地には Aphrodite Egcheios の崇拜あり。而して Egcheios は『投槍の』の意に外ならず。またコリンスにも、武裝せる同女神の像の存せしことは、パウサニアスの紀行によつて明白なるが、更に女神がこの地に於て猛悍なる戰鬪神アレスと相契りたりといふ神話の存するは、ますますアフロデイテの戰鬪的性情を鮮明にするものと言はざるべからず。希臘民衆のうちにて最も剛健の風を負へるスパルタ人が、いたくこの女神を景抑し、キテラの地よりこれを迎へて、新たに Areia 及び Ariontia といふ軍事的稱呼をさゝげし事實も同一の方向を指示するものならずや。その他ミラサの民衆が Strateia (=who goes with the army) の稱呼の下に同女神を崇拜せし如き、マンチネアの地が、アクチユームの戰爭の記念として Aphrodite Summachia の殿堂を設けし如き、(Paus., VIII, 6; VIII, 9) Sulla がカエロネアに於ける戰勝の後、アレス(戰鬪神)ニケ(勝利神)の名と共に、アフロデイテの名を戰勝記念標に刻めるが如き、いづれも戰鬪神としてのアフロデイテの面目を證示するものならざるはなし。

然れどもアフロデイテの崇拜が希臘の地に行はるゝこと久しきに從つて、母系主義の所產たる彼の女の剛猛の性情は次第に銷磨せられ、遂には全く女性化せられて、主として家族生活と

婚姻とを司る神となり、また進んでは美と愛との陶醉境のみをおのが領域となすに至りぬ。

見よ、フアルサロス地方に崇拜せらるゝアフロデイテはPeithoの稱呼を有し、而してPeithoとは、ヘジオドスに從へば、美女パンドラの創造に際して、アフロデイテそのものゝ役を演せる靈格にあらずや、見よ、レスボスに於けるアフロデイテは『Persuasion の女神』と稱せらるるにあらずや。見よ、テベスに崇拜せらるゝアフロデイテは『心を奪ひ去る』女神の稱呼を有するにあらずや。見よ、メガラにはAphrodie Praxis (Pra is=success) あり、メガロポリスにはAphrodite Machanitis (Machanitis は『首尾よきこと』を意味す) ありて、『愛人のために手段を工夫する神』として崇拜せらるゝにあらずや。(L. R. Farnell, Cults of the Greek States, Vol. II, p. 665) 更に多くの古典文學と神話とが、同女神を『人格化せられたる美と人間的愛慾』として、推讃すること、一のHomeric Hymnが、

『あれは人の子に美しく優しき恩賚を與へ、その麗容に微笑を湛えて、愛の花をもたらすキプロスのキテレア（アフロデイテ）を歌はん。』

といへるにも著きにあらずや。

アフロデイテの原始的剛猛性が次第に銷磨せられ行く徑路は、同女神のattributesの變遷にも

可なりよく顯現せるを覺ゆ。

先にいへる如くパウサニアスは希臘の諸地方に『武裝せるアフロディテ』の存せしことを指摘したれど、いかなる武器によつて武裝せるかを傳へず。然るにプルターコスは、そのうちの一つなるスパルタの『武裝せるアフロディテ』を擧げて、兜を戴き、投槍と楯とを手にしたりとなせり。(Plutarchos, De fortuna Romanorum, 4) 之に反してコリンスのアフロディテは兜を戴くことなく、また投槍を手にすることなく、上半身を裸形にして楯を有するのみ。

然らばこの二つの表現のうち、その何れがより古きアフロディテの表象なるか。吾人はフアーネル氏に同じて、前者の後者より古きものなることを主張せんとす。何となれば兜を戴き投槍と楯とを手にする武裝型は、フエニキアの起源なりし形跡あり、現にアフロディテの崇拜が希臘の世界に入りし最初の地と傳へらるゝキプロスの同女神も、全くこの種の武裝をなせり。(Hesychios, Egcheios 參照) 之に反し楯のみを有する型のアフロディテ像を有するコリンスにあつては、多くの貨幣が、半裸形のアフロディテの、楯を手にして翼あるエロスを侍らす姿を鑄出せるを見る。卽ちコリンスに於ては、アフロディテは、母系主義の古き大地女神としての特質の一たる戰鬪的職能を半ば脫して、愛を司る職能に近づかんとする過渡期にあることを示

せばなり。

註 (1) フレーザー氏が引用せる Imhoof-Blumer 及び Gardner 兩氏の著書に、コリンスのアフロディテ神像を目して疑ふべからざる希臘的アフロディテとなし、而してその楯は、アレスの楯を鏡として用ふるものなりと說けり。もし然りとすれば戰鬪的意義の愛と美との意義への變轉が、一面の楯にも詮表せられたりと言はざるべからず。

母系主義の大地女神兼戰鬪神たるアフロディテにして、此の如き宗教的變轉に逢著したりとすれば、而してまた同女神の如く大地女神たり戰鬪神たる性能を持するアテナが同じく母系主義の一神格たりとの推定を當れりとすれば、アテナもまた父系主義の宗教のために何等かの modification を蒙らざるを得ず。而して同女神に關する神話は、實際に於てその然りしことを示唆するが如し。

傳へ言ふ、アテナは武裝したる儘ゼウスの頭部より生れ出でたりと。これ實に異常なる誕生の方法にあらずや。而してかゝる奇異なる誕生說話の底には、何等の意義の潛めるや必せり。吾人はその意義の眞を掴むために、先づこの說話に關する多くの Versions を檢討せざる可らず。

(1) ヘジオドスに從へば、メチスの子生るれば、ゼウスの玉座を傾くべしとの豫言あり。ゼ

ウス之を聞きて大いに懼れ、メチスを欺きて生きながらこれを嚥下す。メチスの子アテナの頭より武裝して生れ來ると。(Hesiodos, Theognis' 886–900)

(2) Homeric hymns の一つによれば、アテナは『黄金色眩ゆきさまざまの武器を握りつつ』ゼウスの聖なる頭より生る。もろもろの神は、『彼の女が鋭き投槍を閃めかしつつ、不滅の頭より躍り出せるとき、』驚きて凝立し、天地は惶れ惑ひ、海は壁の如く立ち、太陽はその歩きを止めたりと。(Homeric Hymn to Athena, XXVIII)

(3) Etymologicum Magnum の記すところによれば、アテナがゼウスの頭より躍り出でしとき、啻に武裝せるのみならず、また數頭の馬に牽かせたる戰車を携へたりと。(Et. Mag., Hippia の條)

(4) ピンダロスは言ふ、アテナの生れんとするや、鍛冶神ヘフイストス斧を揮ひてゼウスの頭を裂き、彼の女は大に叫びて頭の頂より躍り出で、天と地とは彼の女の前に戰ぎぬと。(Pind.,Ol., 7. 38)

(5) エウリピエズの語るところも、ピンダロスの言ふところと略ぼ相同じきも、ゼウスの頭を裂く役はプロメテウスに歸せられたり。(Eurpides, Ion, 455)

(6) Apollonius Rhodius の一註解者の言によれば、Stesichorus もこの說話を傳へ、アテナが full panoply にてゼウスの頭より現れしことを說けりといふ。(Schol. on Apollon Rhod. I. 1310)

(7) フイロストラトスも、アテナが full panoply にてゼウスの頭より躍り出てしことを述べ、更にその出生の際には、すべての神がこれに侍り、ゼウスは愉悅に喘ぎ、ヘラも妬み恚ることなかりしと言へり。(Philostratos, Imagines, 2. 27)

(8) Lukianos の記事によれば、アテナがゼウスの頭より生るゝや、彼の女は、戰鬪舞踊を踊り、楯を振ひ投槍を揮つて、歡喜に充ちたりといふ。(Lukianos, Theon Dialogoi, 8)

すべての神話を自然現象の記述と解せんとする言語學的比較神話學派の學徒たちは、この物語を目して、或は雷霆雷光の發動なりとし、或は曙光の出現となし、或は暴風雨となし、或は大氣の激變となす。之に對して、這般の天然的解釋を排拒する學徒は、アテナは智慮の神なるが故に、萬法の支持者たるゼウスの頭腦より生れたりと說く。然れども此の如き解釋は到底この神話が成立する主要分子——何故にアテナの出現がゼウスの王位を危くするか、及び何故にアテナはゼウスの體の一部より生れざる可からざるかを闡明し能はず。

然らばこの奇異なる誕生説話の眞義は那邊に存するか。これを把握するためには、該説話の話根(ルート)がいかなる點に存するかを考察せざるべからず。吾人の考ふるところによれば、そは、

(1) アテナがゼウスと對抗的地位にあること

(2) アテナが生れながらにして武裝せること

(3) アテナがゼウスの體の一部より生れ出でしこと

の三點に存すと思惟す。從つてまたこの三點を滿足に説明し得れば、この神話の眞義を解明し得たりと信ずるものなり。

アテナの出生は、ゼウスの王座を危くすとの豫言あり、ゼウスこれを懼れてアテナの母を嚥む。これ實にアテナの威力が優にゼウスのそれと對抗するに足ると信ぜられたることを示すものなり。而して吾人はこれに關して一個のすぐれたる類話を有す。クロノスが、おのれの子のために王座を奪はるゝ運命を有すと聞きて、これを嚥下したりといふ神話卽ちこれなり。而して吾人は既に『古代希臘文化に現れたる神々の宗教的葛藤の研究』なる論考に於て、クロノスに關するこの神話が、ヘレニース族と先住民族との宗教的葛藤——詳言すれば、アケーヤ族が信奉せし Celestial religion と、ペラスギー族が信奉せし terrestrial religion との接觸爭鬪とい

ふ文化史實が、これ等の相異る二宗教の頭目ゼウスとクロノスとの爭鬪といふ神話的表現を採りしものなることと明にせり。然らばクロノス對ゼウスの神話と同一の內容形式を有するゼウス對アテナの神話もまた豈に相異る二個の宗教の葛藤の反映にあらずとせんや。切言すれば父系主義の宗教の主宰神としてのゼウスの崇拜と、母系主義の大立者としてのアテナの崇拜とが相接觸して、前者が後者を包攝せしことの神話的表現にあらざるなきか。かく解するとき、ゼウスがアテナの出現に脅威を感じて、これを未開に防ぐ手段に出でしことが頗る理會し易くなるを覺ゆ。

然らば次にアテナは何故ゼウスの體の一部より生れ出でざるべからざりしか。吾人の考によれば、この一事が亦父系主義と母系主義との交替を示唆するものたり。而してこれをよく理解するためには、デイオニソスに關する一個の神話を顧盼するを要す。

デイオニソスの誕生に關する神話は、その內容の怪奇によつて、多くの神話學者を躓かしめたる一大頑石なり。

傳へいふ、セメレがデイオニソスを妊めるとき、ゼウスの雷火に軀を灼かれて死するや、ゼウスは未だ生れざるデイオニソスを取りておのが股に藏め、而して股中より生れ出でしめき

と。(Apollod., III, 4-5; Ovid., Met. III. 253 ff; Herod., II. 146. 等參照)

神話學者の多くは、この怪誕神話を以て一の Natural symbolism となしぬ。しかれどもその說明は太だ arbitary なる根據の上に立ち、各自の解釋が矛盾撞著して、一は他を揆無せずんば止まざるの奇觀を呈するを見る。(Preller, Griechische Mythologie, I. 544; Kuhn, Herabkunft, pp. 166, 167 參照) 思ふにディオニソスは、これ等の神話學者が言へる如く一個の自然神なり。自然の一顯現たる Vegetation の靈的形體なり。然れども彼が人間的形體を備ふるに及びてや、その當然の歸趨として『自然』に沒交涉なる多くの人事的要素がその宗教及び神話に纏繞せり。されば この人事的方面を全く無視して、同神に關するすべての物語を『自然現象の發現』によつてのみ解釋するとき、謬見に陷るは固より當然なり。かくてアンドリユー・ラング氏は人類學的研究の立場より、未開民族の間に見出さるゝ多くの怪誕說話——一男一女が巨人の腋窩より生れ出でたることを說く北歐の物語や、タンガロア神が大地女神パパの腕若くは頭より生れ出でたりとなす南洋マンガイア島の物語等を擧げて、ある存在(ビーイング)が他の存在の體の一部より生れ出づとの信仰及び之を反映したる神話が未開民族の間に廣く擴布せるを指摘し、ディオニソスがゼウスの股より生れしといふ神話も亦、希臘民族が這般の低き文化階段にありしと

きの所產の殘存物なりと說きぬ。(Lang, Myth, Ritual and Religion, II. pp. 244, 263)

吾人の見るところによれば、ラング氏はこの神話の眞義の一半を摑みて他の一半を逸したり。もしデイオニソスの怪誕神話が單に希臘文化の幼稚時代の遺物に過ぎずとせば、體軀の一部より一の存在を生れ出でしめしものは、いかなる神たるも妨げなき理なるに、實際に於ては、この役を演じたるものが、アテナの場合といひ、デイオニソスの場合といひ、常にゼウスに限られたるは何故ぞ。また未開民族の類話が盡く單に體の一部より或る存在を生れしめしのみなるに、希臘神話に於ては、先づ女性の子を外より自己のうちに取り容れて、然る後之を外部に出現せしめたるは何故ぞ。ラング氏は未開民族と希臘民族との神話間に存する同一性のみを認めて、かゝる重大なる相違を閑却せり。而してこの相違點に觸れざる解釋は未だ眞實性の全部を把握したりと言ふべからざるなり。

ラング氏と同じく人類學的研究法によつて、デイオニソスの怪誕說話の解釋を試み、而してラング氏よりも更に强く眞實性に觸れたるものは Bachafen 氏なり。氏はこの神話を解して原始民族が有する社會制度の一なる Couvade の一反映となせり。(Bachafen, Das Mutterrecht, p. 245) 實際地中海沿岸に住せし多く古代民族はこの風習を有したるが故に、氏の見解はある

意味に於ては頗る穩當なりと言はざる可らず。然れども吾人は更に一歩を進めざる可らず。もしデイオニソスの怪誕神話を以て Couvade の反映なりとすれば、ゼウスはただ產褥にある態を擬すればよし。何を苦しんでか自己の股を裂きてデイオニソスをその中に挿入し、若くは母と共にアテナを生呑するの要あらんや。はたかゝる難役を演ずるものが常にゼウスに限らるゝの要あらんや。而してこの二點を解き得ざる間は、問題は未だ闡明せられたりと言ふべからざるなり。

吾人の觀るところを以てすれば、デイオニソスの誕生神話は一種の Adoption 物語なり。母系主義より生れたる一の存在が、父系主義の他の存在によつて社會的に legal recognition を受くることを骨子となす物語なり。この推定は、ゼウスは父系主義の民族の神にして、デイオニソスが母系主義の民族の神なりし事實によつて可なりに蓋然性を增す。(このことの詳細な考察は古代希臘の文化に現れたる神々の宗教的葛藤の研究、第六章第四節及び第二節にあり。)

トラキアに於ては母系主義の大地女神にベンデイス又はブリモーと呼ばれしものあり、後來希臘化(ヘレナイズ)せられてセメレとなり、而してその子として一死一生する男神が卽ちデイオニソスなりき。然るに後代に至りデイオニソスの宗教はトラキアの本土を離れ、マケドニアを通じて北

部及び南部希臘に入り來り、それと共に戲曲音樂の守護神にまで昂揚せりと雖も、しかも彼の本質たる母系主義的要素卽ち一死一生の信仰に至つては、遂に之を拂拭し去ること能はざりしと、プルターコスの記述によつて明白なり。(Plutarch., De Isis et Osiris, 35, 364, 365 等參照) またチタン族が玩具を以て若きディオニソスの心を悅ばせ、彼が遊び興ぜる隙を窺ひて、之を捕へ四肢を裂きたりといふ神話も、(Clem. of Alex., Protrept' II. 17 ff; Arnobius, Adversus Nationes, V. 19) 一死一生するディオニソスの祭儀より生れたること、オシリス、アッチス、アドニス等にまつはる傳說の Analogy によりて明かなり。

オシリス、アッチス、アドニスはみな一死一生する Vegetation-god なるが、アッチスの死するや、その血より菫を生じ、アドニスの死するや、その血よりアネモネを生じぬ。然るにディオニソスの巨人族に殺さるゝや、同じくその血より柘榴を生じたりと傳へらる。(Clem. of Alex., Protrept, II. 19) またオシリスがチフオンのためにその身を寸斷せらるゝや、日の神ラー天界より豺頭神アヌビスを下し、肉片を集めて再び之を活かしめぬ。(Plut., De Isis et Osiris, 18) 然るにディオニソスに關しても同樣の傳承あり。卽ち一神話によれば、ゼウス神アポロンに命じ、寸斷せられたるディオニソスの肉片をつなぎ合せて之を復活せしめたりといふ。(Dio-

doros, III. 62; Clem. of Alex., II. 18; Cornutus, De natura deorum' 30 等參照)

此の如くしてデイオニソスの宗教は希臘に入りても猶强く母系主義的香味を有せしが故に、ゼウスを宗とする父系主義の宗教は之に對して瞠目せざるを得ざりしならん。而して自家と正反對の主義を抱懷せる宗教なるだけ、それだけ之を包攝してその異色を拂拭せんとする欲求を强めしや必せり。而してこの場合に該宗教の頭目として、他の神々より遙かに大なる包囊力を有するゼウスが選まれて、デイオニソスと血緣を結びしは、最も自然の歸趨ならざる可らず。然らばゼウスはデイオニソスの父となるために、何故に同神を股に藏め、また股より之を出さざるべからざりしか。これ一見太だ奇怪なるが如しと雖も、しかも吾人の推定が正しとすれば、その推定の當然の結果としてこゝに出でざる可らざるなり。ゼウスとデイオニソスとの包攝關係は、アポロン對カルネイオス、若くはポセイドン對エレクテウス等の包攝關係とは、大にその意義を異にす。卽ち該關係は、單に一國民神が一地方神を包囊する努力に非ずして、母系主義の勢力を背後に控ふる一神を、該主義より拔き來つて、これを父系主義の宗教の Pantheon の一員たらしめんとする努力なり。ブリモ(セメレ)卽ち女性の血より引き離して、男神の血をデイオニソスに注入せんとする努力なり。さればゼウスがデイオニソスと血族關係を結ぶに當

つては、單に傳說的に親子たらしむるのみにては無意義なり。必ずや文字通りにゼウスがディオニソスを產み出さざるべからず。しかしゼウスは男性神なるが故に、出產法如何といふ難問題を生じ、遂に窮餘の一策として、その體の一部よりディオニソスを出現せしめたるならん。これ決して根據なき想像說にあらず。文化進展の一結果として、Materilinear descent より Patrilinear descent にうつらんとする過渡期にある部族の間には、生きたる風習として這般の奇異なる出產法が行はれつゝあり。北亞米利加の Haida 族の如き、この二個の制度の推移時代にあり、ために今まで母を通しての子女たりしものを、父を通しての子女たらしむる爲めに、男性が體の一部を傷けて、そこより生れ出でたりとなす儀式を行ふ。然らば則ちディオニソスがゼウスの股より生れしといふ神話も亦豈に這般の解釋を許さずとせんや。

然らば則ちアテナがディオニソスと殆んど同一の出產法によつて生れ出でしこともまた父系主義と母系主義との一葛藤の反映にあらずとせんや。換言すれば、母系主義の產物たるアテナを父系主義の宗教の Pantheon の一員とする爲めの止むなき便法の反映にあらずとせんや。かく解することによつて、吾人はアテナがゼウスの體の一部より生れ出でざるべからざりし所以を闡明し得と思惟すると同時に、該女神が生れながらにして武裝せる所以をも理會し得と信ずる

ものなり。何となればアテナは母系主義の一女神として本來戰鬪神たる風格を强烈に具備してゐたるが故に、父系主義の宗教もこれに相當の顧慮を拂ひて、該職能を彼の女に保留せしむるは頗る解し易きことなればなり。

第二　ゼウスとテミス、ディオネ、ヘラ等との關係

ゼウスの配偶と稱せらるゝ女神は頗る多し。その主なるものを擧ぐれば、メチス、デメテル、セメレ、エウリノメ、テミス、ディオネ、ヘレ等なり。(Hesiodos, Theognis, L. 886. ff.) 而してこれ等の配偶者は、ヘシオドス及び近代の神話學者のある者に從へば、單にゼウスに內存する或る性能の具象化に過ぎざること、たとへばメチスがゼウスの『思想』の具體化にして、テミスがゼウスの『法則』の人格化たるが如し。

然れども這般の解釋は、餘りに哲學的に過ぎ、古代人の素樸なる信仰の眞を逸せるものなるが如し。テミスは始めは決して『法則』若くは『正義』の具象化せるものにはあらざりき。アッチカの傳承によればこの女神は大地女神たり。ボエオチアに於ても亦然りき。(C. F. Keary, Outline of Primitive Belief, p. 175) アイスキユロスも亦アッチカの傳承を肯定して、これを

Mother Earth と同一視せり。(Aischylos, Prom, V. 209)

註　ファーネル氏もテミスが『正義』といふ抽象的觀念なることを排拒して、一個の大地女神なることを主張し、『ゼウスとテミスとの結合は、恐らくゼウスと大地との結婚の later equivalent なり』と言へり。(L. R. Farnell, Cuets of the Greek States, Vol. III pp. 13, 14)

セメレはその名稱が既にその『大地』そのものなることを示す。Kretscher 氏は、Seleme といふ語をフリギア語の Zemel より來るとなし、而して Zemel は大地を意味すと言へり。(Kretscher, Semele and Dionysus) 且つまたセメレがディオニソスの母たることも、同女神が大地と深き交渉を有することを示す。何となればディオニソスはプルターコス (Plutarchos, De Is. et Os., 35) が語れる如く、植物の生成を管掌する神たり。さればその母たるセメレは恐らく大地なりしなるべく、こは、ディオニソスが後に葡萄の神に變轉せしとき、Semele が Seleme より出でたる名稱と解せられ、葡萄の實を成熟せしむる "Bright Season" を以てこの女神を目するに至りし消息のうちにもほのめくを覺ゆ。

またエウリノメも大地女神たることを示唆する二三の材料あり。アルカディア地方に於て、この女神がデメテル若くはフロセルピネと深き關係あるが如き、また或る神話系統に於て、オフイオンとエウリノメとが、鮮明なる天空神ウラノスと大地神ガイアとの代表となり居るが如

きこれなり。

ゼウスの正妻ヘラがその本原的性格に於て大地女神たりしことを窺ひ知る材料は、更に多きを覺ゆ。先づ第一に注意すべきは、同女神と山羊との間に存する密接なる關係なり。コリンスの民衆は、Hera of the Height に對して年毎に犧牲として一頭の山羊を供へ、(Zenobius, i. 27; Diogenianus, I. 52) ラケダエモニア人は Goat-eating といふ名稱をさゝげ、且つこれに數頭の山羊を供へたり。(Paus.' III. 15) また山羊の皮を纏ひ、山羊の頭と角とを頭飾とし、皮の殘部を身邊に垂れたるヘラの神象が、希臘の多くの地方に存せしことも確かなる事實なり。(Frazer, Pausanias, Vol. III. p. 338; müller-Wieseler, Denkmäler, I. pl. LIX, 299 b) 而してフレーザー氏がその大著 Golden Bough (Vol. I. p. 328) に力說せる如く、或る神が或る動物の喫食者と稱せられ、若くはその皮を身に纏ふ場合には、該動物は甚だ屢々本原的にその神の embodiment たりき。然らば則ち『山羊食ひ』の稱呼を有し、且つ山羊の皮を纏ひしヘラもまた本來山羊をその embodiment とせし女神なりしなるべく、而して山羊は殆んど常に生成の力の象徵なるが故に、(その好箇の例證はデイオニソスと山羊との關係なり。)ヘラの原始的性格が『大地生成の力』に存せしこと自ら明かなるを覺ゆ。

ヘラが大地女神なりしとの推定の蓋然性を強くする資料は、この地にも決して鮮しとせず、アポロンに捧げられたる一の Homeric Hymn に從へば、ヘラはチフオエウスの母たり。而してチフオエウスは最も顯著なる Earth-born being なるが故に、これを生みしヘラは當然大地そのものならざるべからず。ヘジオドスはチフオエウスがヘラより生れたることを說かずして、これを他の大地女神 Ge の子となしたれど、一方に於てヘラを目して、Earth-born の怪たるヒドラ及びネメアの獅子の撫育者となしたるが故に、この詩人も亦ヘラを以て大地女神となす信仰を肯定したりと推斷し得べし。更にソフロンの茶番狂言の中には、ヘラを以てヘカテの母となす。然るにヘカテは Aggelos の稱呼の下に一個の Chthonian being として狂言のうちに現るゝが故に、その母たるヘラはまさしく大地ならざるべからざるなり。(Schol. on Theokritos, 2. 12)

若しそれデメテル及びデイオネが大地女神たりしことに至つては、希臘の古文獻にその證徵極めて多く、且つ人のよく知るところなれば、今更喋々するの要なかるべし。

吾人は如上の考察によつて、ゼウスの妻たる多くの女神が、本來に於ては盡く大地女神なりしことを知り得たり。然らばこの現象はいかに解釋すべきか。最も容易に持ち出さるべき解釋

はゼウスが天空神なるが故に、これが對偶として、その妻に大地女神を拉し來れりとなすものなるべし。然り天と地とを一の dual existence とする觀想は、多くの民族の間に見出さる。然れども天と地とを一の dualism とする觀想と人格神としての天空神及び大地神の對立との關係につきては、自らそこに二種の區別あることを忘るべからず。卽ち

(1) ある一民族又は一部族が、天地の間に覆載の關係を認めて、この關係をおのれの民族又は部族內の男女神に投入せる場合。

(2) ある一民族又は一部族が、おのれ等が有する天空神と、他の民族又は部族が有する大地女神とを結合せしめて、そこに天地の覆載關係の反映を求むる場合。

これなり。而して第二の場合に於ては、何故に或る特定の民族又は部族の大地女神が、他の民族又は部族の天空神の配偶に採擇せられたるかの理由を明にせざるべからず。

今ゼウスとテミス、デイオネその他の大地女神との配偶關係は、第一の場合に屬するか、若くは第二の場合に屬するかといふに、疑もなく後者に屬することを見出す。何となればこれ等の大地女神の崇拜の中心は該地方に分據し、且つ之を崇拜する部族も區々にして、決してゼウス崇拜の主要部族(アケーア族)と同一ならざる事實の存すればなり。然らばゼウスはいかなる

理由若くは機緣によつて、これ等の他部族の大地女神等をおのれの配偶とするに至りしか。吾人はそこに異りたる部族の宗教的接觸の影響を見んとするものなり。然らば實際に於て、吾人の推定を裏書する事實あるか。吾人はこれに對して確實なる證徵を提供すること能はざるを遺憾とせざるを得ず。されどこれを示唆する若干の材料は、希臘古文獻の諸所に散見せざるにもあらず。

テミスを見よ。この大地女神はプロメテウス及ひプリアウス・アエガエオン等と同じくチタン族に屬す。而してチタン族は、本來アケーア族が南方希臘に移住せざる以前に、同地方に盤居せし先住部族の神々にして、同族が南方希臘の古き神クロースに黨して新來のゼウス神族に抗爭せしことを說く神話卽ち gigantomachia の神話の存するも、兩者が共に古き神々として、共通の利害を感じたればなり。

尤も神話の傳ふるところによれば、チタン族中に於て、テミス、プロメテウス及びプリアウス・アエガエオンの三神のみは、當然クロノスに黨すべくして、却つてゼウス神に援助を與へたることを說く。然れどもこは、これ等の三神が、他のタイタン族の宗教的淪滅と運命を異にして、希臘文化の後代に至るまで實際の祭儀を以て崇拜せられたるによる。見よテミスはデル

ファイに於て崇拜せられて、その託宣はアポロンのそれに先行し、プロメテウスは雅典に於て、プリアウス・アエガエオンはエウボエアに於て、それぞれ崇拜せられたるにあらずや。(Solinus, II. 16) かくて他のチタン族が宗教的葛藤の餘殃のために、實際的崇拜物の上に見る影もなく淪匿せしに反し、これ等の三神のみは永く崇拜物の對象となり續けし故に、希臘民族は、これを解して、ゼウスとクロノスとの大爭鬪の際前者に援勁せしためなりと言ひ傳へしものなりと解し得べし。

註　這般の見解を抱くものに、フアーネル氏あり。詳しくはその著 Cults of the Greek States Vol. I. p. 20) を見よ。

しかれどもテミス及びプロメテウスが、決してゼウスに心服せしにあらずして、單に利害の打算上よりクロノスに黨せずしてゼウスに黨せしものなること、從つて內心に於ては强くゼウスの專橫に憤のゐたることは、アイスキユロスの悲劇『縛せられたるプロメテウス』によつて明かなり。合唱隊が、

『新なる神
　オリムポスの王座に上りて、
新なる掟

ゼウスの邪なる旨を行ふ。
チタンの世の跡ははや滅びぬ。」
と歌ひ、若くはプロメウスが
「ゼウスは恣なる法律をつくつてゐる。だが早晩運命の鐵腕に捕つて、小兒のやうに懲え上る時が來るのだ。」
と叫びける如き、決して悲劇詩人の架空的なる言辭にあらずして、その燃犀の眼によつて古き宗教階層と新らしき宗教階層との間に渦卷きし文化的爭鬪を看破したるものなること、同詩人の他の作品に於けるさまざまの宗教的見解より推して明かなり。

しかも他のタイタン族が實際の宗教的崇拜を失ひたるに反し、テミス等が依然として南部希臘の地に崇拜せられし以上、ゼウスの宗教は何等かの方法によつて、これを自己の勢力範圍内に包攝せざるを得ず。かくの如くしてプロメテウスは或る傳承にありては、ゼウスと兄弟關係を結びたるを見る。然らば則ち彼と同じくチタン族の一人たり、而してまた彼と同じく實際の崇拜を享け續けたるテミスが、ゼウスと何等かの血緣を結ばざるべからざるは明かなり。而してテミスは女性たり大地女神たりしが故に、男性にして天空神たるゼウスに對しては、その配

偶となることより以上に恰當なる關係を結び能はざるにあらずや。

テミスに比して一層明白に『被征服部族の大地女神』としてゼウスの妻となるの運命を荷ひしことを語るものは、デイオネの宗教的變轉なり。

ゼウスとデイオネとの關係を明に知らんと欲せば、ドドナに於けるゼウスの職能に眼を注がざるべからず。ゼウスはドドナの地に限りて、託宣神(オラクルゴット)として鮮明顯著なる形相を示す。固よりゼウスの神宣は他の地方にもこれ無きにはあらず。レバデアの神宣の如きこれなり。然れどもレバデアに於けるゼウスの神宣は、本來同地の地方的崇拜の主體なりし蛇神トロフオニスによつて傳へられたるものにして、ゼウスは後代に至つて之をおのれに包攝したるに過ぎず。(Pausanias, IX, 39; Strabo, 414; Schol. on Aristophanes, Clouds, 508; Lucianus, Dial. Mort., III) またオリムピアにもゼウスの神宣ありと考へられしこと、ストラボーの記述(Strabo, 353)によつて伺ひ知らる。然れどもこはフアーネル氏が論究せる如く、曖昧にして疑ふべき餘地多し。而してこれ等の地を除きては、ゼウスの神意の發現は、oracle によらずして、主として sign 若くは omen によりたること、レスボスエリトリー、バルネスに於けるゼウスの祭儀に著しく、またホメロスがイリアス第八に說けるところによつて明かなり。然らば卽ちゼウスが

託宣神として潑溂たる活動をなせるは、殆んどドドナの地に限られたりといふことを得べし。これそもそも何を意味するか。

吾人はこの寧ろ奇異なる宗教現象に對するとき、之に類せる現象が、デルフアイのアポロンの宗教に絡ることを想起せざるを得ず。

恐らくペロポネサスが未だ充分に希臘化せられざる頃にデルフアイに占據して、遂に同地バルナソス南麓に一種の宗教國家(テムプルステート)を樹立せるアポロンの宗教は、神宣を以て名あるが、しかも同地の神宣は決してアポロンによつて創剏せられたるものにあらず、本來大地女神ガイアに始まりしものなること、種々の證徵によつて明かなり。その證徵の二三を擧ぐれば、

(1) ガイアがテミスを通して、同地の託宣權をアポロンに讓與したりといふ傳說が多くの文獻に記されたること。(Pausanias, X. 5, 7; Strabo, IX, 422; Eumenides, 2 ff. 4 fi; Euripides, Iphigenia in Taur., 1259 ff.)

(2) デルフアイに於けるアポロンの女司祭はメリッサイと稱せらる。然るにメリッサイの稱呼を有する女司祭は、他の地に於ては盡く大地女神(たとへばデメテル、プロセルピネの如き)に仕へたり。(Kallimachos, Hymn to Apollon, 110; Hesychios, S. V. Melissai;

Schol. on Pindaros, Pyth., IV. 106 ;Schol. on Theokritos, XV, 94; Lactantius, Divin. Institut. I. 22. 等)

(3) 月桂樹が、アポロンの宗教がデルフアイに占據する以前より、ガイアの神宣に缺くべからざる宗教的意義を有したること。

而してこれ等の事實と相並んで、デルフアイに於けるアポロンの神宣が、ガイアのそれを奪へるものなることを占する他の一證徵あり。そは同地に於けるアポロンの託宣が、大地より發生する瓦斯の吸入のために生ずる女司祭の狂亂混迷によつて發せられたる事實なり。

思ふにアポロンの神宣は決してデルフアイに限れるものにあらず、希臘本土及び小亞細亞の諸地に於て頗る名ありき。然るにこれ等の地に於ける同神の託宣は、一として瓦斯の吸入によることなかりき。即ち

(1) テベスの託宣は、犧牲にささげたる動物を燒きて、その肉片の徵候によつて伺はれたり。

(2) クラロスに於ては、司祭が聖水を飲みて託宣を發したり。

(3) プラタエア附近なるヒシアイにても、司祭がアポロンに神聖なる泉の水を飲みて神宣を傳へたり。

(4) コローペに於ては、アポロンの神宣が伺はんとするものは、その疑問を札にしるして司祭に渡す。司祭は之を一個の籠に密封し、翌朝封を破れば、籠の中にアポロンの答見出されたりと云ふ。

(5) テベスのアポロンの神宣は鳥の鳴聲によりて伺はれぬ。

(6) キアネアイに於ては、アポロンの司祭が同神に神聖なる池の水を凝視し、そこに見出でたる物影によつて、未來に關する啓示を知る。

(7) スラに於ては溜水池に游泳する魚の運動を見守りて、神宣を知る。

これによつて觀れば、アポロンの託宣には、プラトーンが Phaedros に述べし如き divine maddnessの面目を帶ぶるもの一もこれあらざりしことを知る。これ大地神にあらずして celestial deity なる同神の託宣として頗る自然なり。見よ、同じく天神の一なるゼウスの神宣も殆んどすべてアポロンのそれと同一の手段によつて行はれしこと、かのピンダロスの讃詩の證示するところなるにあらずや。(Pind., Ol., 9, 65) 然るにデルフアイに於てのみアポロンの託宣が、濃厚に divine madness の色調を帶び、而してその狂亂狀態は大地より發生する瓦斯の吸收によるは何故ぞ。蓋しこれ同地の神宣權が本來大地女神の手に存せしを、後代に於てアポロンが

これを自己の掌中に奪ひしもの、しかもより古き民衆の宗教的保守主義に多少の顧慮を拂ひて。自己の sane なる託宣法の鋒鋩を藏め、舊來の divine madness をその儘採用したるが故にあらずや。

然らば則ちゼウスが他の諸地方に於てはいづれも sign 若くは omen によつておのれの意志を詮表するに反し、ドドナの地に限つて oracle によつて之を發表するといふことは、デルフアイに於けるアポロンの託宣の場合と同じく、古くよりこの地に行はれしデイオネの oracle を攝取したるためなりと解するを得るが如し。

思ふにゼウスは明かに北方起原の神にして、極めて古き時代にその崇拜が希臘西北部の山地エピロスに將來せられたる形跡あり。然るにエピロスにはペラスギ族の大地女神デイオネの崇拜あり、同女神はドドナに磐居して女司祭を通して託宣を傳へゐたりき。かくてゼウスの崇拜がこの地に入り來るや。男性神の宗教か女性神の宗教を光被し、その結果として神話的には、デイオネが大地女神たるを緣として、天空神ゼウスの配偶となり、宗教的には、女神の託宣權が男神の掌に移りしものなるべし。

もしそれセメレに至つては、明白にゼウスを信奉せし主要部族と異りたる部族の大地女神た

りその中にてヘラが特に嫡妻に選まれしは、何故ぞといふことなり。

卽ち同女神はトラキアの母系主義の部族の大地女神にして、デイオニソスの母たり。而して、デイオニソスが若き男神たりしために、ゼウスの子とならざるべからざりし如く、セメレは女性神にして且つ大地神なりしが故に、天空男神たるゼウスの恰當の配偶として採擇せられたるなり。

かくの如く考察し來るときは、ゼウスの配偶と稱せらるる大地女神の多くは、

(1) 本來ゼウスとは何等の血緣を有せざりしこと。

(2) 單に血緣なかりしのみならず、その崇拜の部族をも異にしたること。

(3) 血緣の設定は、ゼウスを信奉する部族とこれ等の女神を信奉する部族との史實的接觸より生れしこと。

等が略々明かになるを覺ゆ。

然らばゼウスの他の配偶たるメチス、デメテル、エウリメノもまた同一の宗教的變轉の產果なるか。吾人が有する現在の知識を以てすれば、この問に對しては、何等の確答をも與ふること能はず。ただ彼等が本來大地女神たりしことを推定し得るのみ。

最後に殘る疑問は、ゼウスが此の如く多くの配偶を有し、而してそは盡く大地女神なるに、この疑問は、ヘラを崇拜せし本原的部族が何者なりしかに注目するとき容易に解明せらるべし。

ヘラの崇拜は、外國より輸入せられたる何等の痕跡をも有せず、而して一方に於てはボエオチア、エウボエア、アッチカ、シキオン、コリンス等に於て特にその崇拜が古く、且つ盛んなりし事實を見出す。これ等の事實は、ヘラがゼウスと同じくアケーア族の grimitive heritage たることを證示す。然らば則ち大地女神として天空神ゼウスの配偶となりしものは、ヘラを以て最も早しとなさざるべからず。何となれば先に言へる如く、同一の部族内に於ては、天空神と大地女神とは、天地の覆載觀念よりして早くより配偶關係を結び易きに反し、他の部族の大地女神を拉し來つて、同一の關係を結ばしむることは、該部族との接觸若くは該部族よりの宗教輸入を豫想すればなり。

ゼウスとヘラとの夫妻關係が早くより生じゐたりとの推定は、希臘の文獻及び銘刻等によりて遡究し得る最も早き時代に於て、ヘラが既にゼウスの妻として崇拜せらるるを見出す事實によつて確めらる。アルゴス、プラタエア、サモスに於ける兩神に關する古き神話と祭儀との如き、はた希臘の多くの地方に於ける Hieros gamos が極めて古き時代に發生せる如き、その確

實なる證徵たり。(Pausanias, IX, 3; II, 17; I, 18; Herodotos, I. 31; Theokritos, 17, 131; Plutarchos, Conj. Praec. 141; Hesiodos, Theog., 922) その他カリアに於けるヘラと Zeus Panamoros 及び Zeus Boulaios との結緣の如き、レバデアに於ける King Zeuo と Hera, the holder of the reins との合祭の如き、アルクナイオン山上に於ける祭壇がこの二神に共通にささげられたる如き、クリート島に於ける神への誓約にゼウスとヘラとが夫妻として口にせられる如き、いづれか兩神の結合の古きことを語らざるものなるべき。而して吾人はここにヘラがゼウスの嫡妻となりし原因を見出し得と信ず。然れどもヘラが一たびゼウスの配偶となるや、大地女神としてのヘラの內性は次第に稀薄となり、そのゼウスとの夫妻關係は、天空と大地との對立より來る physical couple の意義を有するよりも、寧ろ家族制度に於ける human couple の反映としての意義を有するに至りぬ。(このことは天空神ウラノスと大地神ガイアとの夫妻關係が、主として physical significance を有するのみなると比較するとき一層切實に感得せらるゝし。) その二三の證徵を擧げんに、アルカディアなるメガロポリスに一の神殿あり。"Full-grown" の稱呼を有するヘラを祀り、ボエロチアなるプラタエアにも、同一の稱呼を有するヘラの崇拜ありしこと、パウサニアスがその紀行に、

『人々はヘラを呼んで "Full-grown" といふ。同女神の像は巨大なる立像なり』 (Paus., IX. 2)

とあるによりて明かなるが、ヘラがこの名稱を有するに至りしは、同女神がこの地に於て充分に成長して婚期に達し、而して同地のキタエロン山上にてゼウスとの婚姻が行はれたるが故なりといふ。(Eusebios, Praepar. Evang. III. 1. 5.— フレーザー氏引用) またアルカディアなるスチムフアロスに於ては、

『同地の人々の言によれば、パラスゴスの子テメノスが古きスチムフアロスの地に住みて、ヘラを養育し、彼の女のために三個の聖所を設け、彼の女に三個の名を與へぬ。卽ち彼の女の未だ少女なりし時には「子供」と呼び、ゼウスと結婚せる時には「成熟」と呼び、彼の女が或る理由の下にゼウスと論爭してスチムフアロスに歸へる時には「寡婦」と呼びぬ。』 (Paus., VIII. 22)

と傳へらる。これ等の傳承は、大地女神としてのヘラの本原的性格がその重要性を失ひて、民衆が、Heavenly queen 又は goddess of woman としての同神に崇拜の力點を置くに至りしことを示すものならずんばあらず。

註

(1) ハリソン女史は、ゼウスとヘラとの關係が後代の發生なること、及びヘラはゼウスを夫とするに先つて、ヘラクレス、ヘリオス等を夫とせしことを主張せり。Classical Review, 1893 p. 74)

(2) フアーネル氏は之を駁擊して、ハリソン女史の theorg が薄弱なる證徴に依據せること、及び證徴のあるものが女史によつて誤まり讀まれたることを指摘せり。詳しくは Cults of the Greek States, Vol. 1, p. 199 ff. を見よ。

(十一、十一、七)

社會問題と宗教(一)

‖並びに是に關する過去宗教の考察‖

二十二鐵鎧

A 改造

世界の大戰が終結を告げてから、先づ吾人の口に繰返された言葉は此の改造と云ふことであつた。大戰後世界の人類が等しく唱へてをる此言葉ほど、痛切に呼ばれたことは、今迄での歴史に於て見出されない樣である。それ丈け眞劍であり、又大切な問題である。宗教家は異口同音に云つた。世界の人類は今こそ本當に十字架の前に涙を流して、心から改悔(リペンタンス)をして過去の罪を神に謝せなければならぬと。げに、その昔モーゼに率ゐられ難を逃れて、エジプトからシナイ半島に渡り。ジョルダン河の西カナーンの地に國を定めたイスラエルの人達に向つて、追放や、迫害の苦しい出來事のある度毎に、それは彼等の過去の應報であることを敎へ、エホヴ

アの御旨に從順である樣に常に繰返へして警告したのは、豫言者達の努力であつた。然し、人類は悔い改めなかつた。遂に、世界の人類が修羅の亂舞を演ずることゝなつた。今度と云ふ今度こそは、眞面目に悔を後に殘さぬ樣に改めなければならぬ時が來た。今迄お互の爲したこと、お互の考へたことは間違つてをつた、だから大いに考へ直し、改む可きは改めて行かねばならぬと云ふのが此の『改造』である。是をエルウード氏の言葉を藉りて云へば今度の大戰爭は十九世紀西洋文明の基礎を、綿密に研究して居なかつた人にとつては驚愕の種であつたが、今で見れば、大戰は外交、或は其他、何れの方面かの偶事突發でなく、過去五十年に亘つて發達して來た自然の結果であつて、戰爭は西洋文明の基礎に腐敗の存して居た事を暴露したに過ぎない。卽ち主我又物質主義の社會哲學を基礎として、その上に安全な社會組織を築き得るかの如く極め込み、個人も國民も主我又は物質上の滿足、暴力を筋書にして其れで安全融和の秩序が生ずるかの如く考へて來た (6, p. 2)のが大なる失敗であつた。

今日まで我が日本も度々外國と戰爭をした經驗を持つてをるが、戰後に起つた國民の感想は如何であつたろふか。今までは唯だ、戰爭に勝つた滿足の情と、復仇されない用意位が國民の頭に浮むだと見るのは、穴勝自分のみの見解ではあるまい。然し、此度の世界大戰後の一般世

界人類は、勝つたと云ふ方も、敗けたと云はるゝ方も、勝つた喜悅よりも、敗けた悲みよりももつと、もつと或る重要な問題を考へさせられてをる感を深くするの事實は否むことはできまい。而して此重要問題は種々の方面に類別されるであらふが、その根本精神から要約すれば卽ち、改造問題なのである。

B 改造問題の根源

スタイン氏の云つてをる樣に、第十五世紀の世界人類の仕事は、藝術の復興であり、第十六世紀のそれは、宗敎改革であり、第十七を紀のそれは、科學の發達であり、第十八世紀のそれはデモクラシーの發展であり、第廿世紀のそれは社會の改革と改造とに在るのである。(3, p. 1)

それで現今吾人が耳にする改造問題は、個人的又は主觀的のそれでなくして主として社會的又は客觀的の方面が考察され、或は取扱はれてをることを認むるは、蓋し吾人の過去の生活上に於ける缺陷の反動とすべきであらふ。現今社會問題なる名目の下に區分されてをる。曰く勞働問題。曰く男女兩性問題。曰く優種問題。曰く、救貧問題。曰く兒童保護問題等は卽ち之である。之を他の言葉で云へば、人間そのものゝ問題でなく、人間相互關係の問題だと見るエルウード氏に一應同意することができる。(6, p. 3.)

今日までの世界は强者のそれであつたと見ることが能きよう。勢力、權力、武力、金力等の所有者が自己の所有權を惡用し、濫用した時代であつた。資本家と勞働者。男子と女子。地主と小作人。富者と貧者。成人と幼者。貴族と平民。等の對立に於て過去の社會は前者に有利に、後者に不利に、取扱はれたものであつたと云ふのが一般の見解である。前者は後者を苦め、後者は泣いて前者の犧牲として永い間惱むだ。だから、今後如何にして兩者が平等に人間としての生活を享受するかと云ふのである。その外部的解決の方法は識者の研究と運動とに俟たねばならぬ。私は今その方法如何と云ふ問題も大いに大切であるとを認むるが。他の、もつと根本的であると思惟する點を考察して見たいのが本小論文を草する所以である。さて此の問題を論ずるに當つて、吾人が第一に着眼せねばならぬ點は、お互は人間であると云ふこと、卽ち人格の所有者であると云ふことを顧みることができなければ此問題は皮相に終る。その解決は淺薄であつて不徹底である。過去の或種の資本主が勞働者を人格の所有者として取扱はなかつたとすれば、つまり、その資本主自身も自らの人格を沒却したものである。彼等が非人道的態度を以て勞働者に臨んだとすれば、それは自己の人間にあらざるとこを表白するも同然である。そこにお互が人間であることを忘れては駄目である。救貧問題でもさうである。貧乏人が可哀相である

と云ふのは人情の然らしむる處である。と云つて唯だ生命の無い人形に衣服を着せたり、食を與へたり、靴を穿かせたりする樣な態度を執ることは、それは餘りに人生を遊戯視し過ぎる。もし人間が無生物であるとすれば、與へた金品は永久に懷中し、與へた食物は永久に口中にして、失はないであらう。それなら甚だ都合がいゝ。然し、何が故に貧乏であるかを究めた上、眞面目に働いても尙妻子を養ふに充分のパンを得ることができないとすれば、その原因はその制度等に在るとせねばなるまい。その制度の改革は働かす雇主の覺醒に俟たねばならぬ。又貧乏が怠惰から誘致されたものであるならば如何に金品を與へても直ちに消費して終ふ。要點はその貧者をほんとうの人格者としての人間に指導してやらねばならぬ。でなければ不徹底である。結局それは一人の放蕩兒を一生養ふてをく樣なものである。社會が相手にせぬから可哀相だと云ふので免囚保護事業を起すのは表面的の云ひ分であつて唯だそれ丈けでは物足らぬ。彼等出獄人をして自己は人格者として世に立たねばならぬと云ふ覺悟を與へてやらねば誠の親切とは云へまい。彼等が過去の罪惡を繰返へして再び免囚保護會に入る樣なことに成つては悲しいことである。ロンドンの街頭を練り歩く勞働者の一隊がその先頭に押し立てて行く旗標の文句を注視して見るといゝ。

"Damn your charity! We want Justice, not charity!"

忌々しい、おまい達の慈善とは何だ。俺連の要永するものは正義である。慈善ではないのだ！と云ふのである。その意味は資本主なるものが今日迄に礎いた富は不正、不義、不當の手段に依つてである。彼等の金庫の中の今の黄金(ゴールド)は、彼等の無慈善の惡魔根性から搾取した俺達の貴い血液の象徴ではないか。勞働問題が八ヶ間しく唱へらるゝからと云ふので、今更らの樣に慌はてて表面慈善なる名目で、幾許かの黄金を社會に蒔き散らす位では、覺醒した勞働者は承知しない。彼等の富の提供そのことは至極結構であるけれども、彼等の富そのものが正義公道を過程としない限は、そこに何等の價値がないのである、即ち資本主が勞働者を機械か、奴隷の樣に取扱ふ間は、資本主自身も眞實に自己が人間であることを裏切るものである。兩者がほんとうの人間として社會に立ち、立ち得させられない限は問題は根本的に解決されない。根元を覺らずに徒らに慈善なる好遁辭で、一時を糊塗せむとするブルジョアー階級の人達は、東西を辨へない兒童に棒飴を舐めさすることに依つて、自己の從來の地位が安全に保證さるる位に考ふるの類である。然し現今の勞働問題はそんな淺薄なことでは到底解決は望まるべきでない。勞働問題は唯だ時間や賃銀の問題でないと思ふ。もつと内面的に深い意味がなければならぬ。

『今日の勞働問題に於て人々の第一に要求する所の自由、卽ち各人は平等に待遇され、其範圍內に於て選擇の自由を有する等の事は、此問題に於ては亦其アプリオリ(先天的要素)として考へられねばならぬ點である。是故に今日の改造問題に於て其基礎となるものを求め行けば、結局勞働問題等の外部生活を通じて現はるゝ內部生活發展の要求に他ならない』(7, p. 143)

於茲勞働問題は內的には「人間相互の關係」以上の意味のあることが明かにされた。而してその內部生活の發展とは、自我が自由なる發展を逐ぐること、(7, p. 143)卽ち、自由なる人格の自己的發展創造(10. p. 67)であつて、私が先きに、ほんとうの人間としての平等が根柢的のものであると云つたのは此意味である。

C 社會問題と宗教

さて如上の歸結としては、改造の根柢は人類の人格的自由の確立でなければならぬ。從つて現今取扱はれつゝある社會問題解決の要諦としては、必ず此基調を無視することのできないことを明にしなければならぬ。次に考へなければならぬことは、然らば此の自由な自己發展の目的は、何物によつて如何に吾人の生活上に完全に實現せしめ得るか。然かも、それが改造の一面として見られてた社會問題の解決の一機能として、どんな關係に在るかと云ふことである。

自由なる自己發展は吾人の內外生活の統一作用であつて、物理的發展と異つたものである。哲學で云ふ當爲(Sollen)の世界に屬するものである。だから他の言葉では之を規範意識(Das Normbewusstsein)と云ふことができると思ふ。

是を理想主義から云へば理想的要求の發露である。心理的に見た點からすれば、此要求を充たす部門は我々の人生の經營の上に色々あるであろふが、宗教的要求は亦たその一方面でなければならぬ。今、此宗教的要求が吾人の人格發展或は創造の機能として考へた時に部分的のものか、又は全部的のものか、を確定し、もし、それが後の場合であるとすれば從つて社會問題の內面的根柢が明瞭になつて來ると思ふ。

宗教的要求を規範意識の上に立てむとした人の中先づ三方面に分けて各その立場を異にしたものと認むることのできるものを概觀して見よう。卽ち、

(A) 智的規範意識
(B) 美的規範意識
(C) 道德的規範意識

である。(A)の意識を主張した學者は云ふまでもなく唯理論の傾向の人に見出される。彼の中

世アンゼルムス（Anselmus, 1033-1109）の如きはそれである。Credo ut intelligam（吾等が信仰するは更らに進で眞理を理解せむが爲である）とするのが彼の出發點である。故に宗教の眞理は理性のみに依つて定むることができるとするものである。神の證明に於て彼は普遍性があるほど實在が確實である。而して神は最も一般的のものだから、神は實在すると云ふ、實體論的立脚地に在る。スピノザ（Spinoza, 1632-1677）はアンゼルムスとは余程趣を異にするが、彼に於ても亦た智的傾向を認むることができるようである。

Amor Dei intellectualis（神に對する智力的の愛）は卽ち神の認識であり、同時に萬物の認識であるとするのが彼の主張である。

(B) の立場に在る者としては哲學史上彼の英國のシャフツベリー（Shaftesbury, 1671-1713）は代表の人と見られよう。彼に從へば、すべて價値あるものは眞、善、美に轉向するインスピレーションである。吾人は常に自己以上の理想に對して向上すべきである。卽ち個人的精神を捨てゝ、より高いものに向ふものである。之れは宗教的心醉の狀態であつて、その情緒の極は愛である。而して彼は宇宙の調和、自然界發展の美に合目的性を發見し、そこに神の榮光を仰がむとする宇宙的樂天觀に立つたものであつて、彼の此觀念は美的憧憬によつたものと認むるこ

とができる。卽ちインスピレーションを通じて宇宙と冥合する時に吾人の宗教的要求が完全に充たさるゝとするものである。彼が自然神教(デイズム)を奉ずる一派に屬する者とせらるるのは此の意味である。

(C)　は同じく自然神教から發出したものである。シャフツベリーは自然神教が企てた第一の方法卽ち、自然哲學を採用したものであつて、此の(C)は、その第二の方法卽ち、倫理的世界觀に立つものである。是に依れば宗教の本質は道德的意志と行爲とに在るとするの說である　吾人の宗教的生活は、吾人が義務を考へ、義務によつて人生に生されて行かむとする道德的要求の必要上立てられたものである。カントの立脚地は之である。彼に於ては幸福と德との符合の實現が神と人間不滅の觀念を生むだ。又人間には常に感覺的衝動と道德的衝動とが爭鬪を爲してをる。而して吾々には自由意志が與へられてをるから常に惡に向はむとする傾向がある。だから此傾向を轉じて善に向はしめるには神の信仰がなければならぬとする。

然し、玆に考ふべきは以上三ツの規範の外にそれ自體として、吾人の生活に卽した、特立の所謂宗教的規範意識はないであらうか？　獨の西南學派に屬すとせらるるヴヰンデンバンド(Windelband)の唱導した　Das Heilige (聖なるもの)　(Präludien)　の思想はまさに、吾人の豫想を

實現するものである。彼は智、情、意の外に宗教としての規範を立てた。彼は考へた、勿論是等三者の根柢としては夫々密接の關係はあるが然も同一のものでない規範を立てた。卽ち意識の背反である。それは規範と自然法則との背反であつて、玆に、この背反の意識は當爲(ゾレン)として必然性を以て現はれて來る。而して宗教的生命の要求は此の燃ゆる樣な熱烈なアンチノミーが吾人の經驗の上に建設さるる時に起る Das Heilige の意識である。かくて、超越的理想に向はむとする精神的絕對價値の世界が開顯する。理想或は意味を含むだ當爲の世界は、まさに價値の世界であらねばならぬ(8, p 45)今玆に、吾人が明確にして置かねばならぬことは、之の宗教的規範なるものは他の智的、美的、道德的規範と全然別個の無關係のものと見るの誤謬に陷つてはならないことである。吾々の經驗生活から見る時には是等眞、善、美の規範は、夫々吾人の生活に於て價値を有するものである。而して宗教的規範は是等の全體に通ずる絕對的、普遍的妥當性を保持するものである。

ミユンステルベルグ氏の說明に從へば、

(1) Religion is according also a form of apprehension through the over-personal consciousness, and it is in no other sense necessary than logical, aesthetic, and ethical values

themselves.

(2) .....But religion is the form of forms; it is absolutely ralid for the connection of that which is itself in rarious forms (1, p. 358)

と云ふてをる。右の(1)は宗教の超個人的規範意識と、その眞、善、美の價値と關係を示し(2)は、それが、之等諸價値に對する絶對的妥當性を有することを述べたものである。

米國のロイ・ウッド・シェラース氏(Roy wood Shellars)は、その著、The next Step in Religion の結論に於て今後宗教の發達に、二大要素が大切である。それは德と價値とであるとしてをる。(4, p. 222)それで、社會問題の根柢に、之の宗教の絶對價値が人格を確立する時に、その解決の方針が徹底して來るわけである。

ピーボーデー教授は、兩者が密接の關係を有するものであることを說き、現代の社會問題の取扱方が、とかく物質的に形式的に傾かむとすることを指摘し、そこに、精神化作用の必要を唱導してをる。

The first may be ascribed as the spiritualization of the Social Question, and the second may be described as the socialization of the religious life (3, p. 191)

是によつて見る樣に、彼は宗教生活の社會化が、社會問題の精神化であるとするものである。

さて、玆に、闡明してをかねばならぬのは、宗教の社會化とは如何なる意味か。それは、從來の宗教の定義として本質的に缺げたものであるか或は、その作用として之れを實現せしめなかつたとするものか。又宗教は元來個人的のものでなくて、社會的のものであるから宗教家が大いに覺醒さへすればよいとするものか、或はそれは元來個人的のものだから社會化など云ふ問題に關與すべきでない、唯だ各個人が信仰に入りさへすれば別に、そんな運動に沒頭せずとも自然に社會化さるるものか、色々の說が存在してをる樣である。

(1) 宗教の社會化は宗教の原理或は本質の更改又はそれに附加するの必要を絕對に認めないものである。バッテン教授は宗教の原理には、すでに社會化機能が存在してをつて、別に更改又は附加すべき性質のものは無いことを力說して次の樣に云つてをる。

The socializing of religion is not a project for the future, but a process already well under way (2, p. 236)

又宇野文學士は、氏の論文「宗教の社會學的見解と個人的宗教」に於て、此の消息を明確に論斷されてをる。(11. pp. 95-96)

「社會の宗教的活動は多少の社會學的考慮を加ふれば、大體上個人の宗教活動の原理を以て說明し得るのであつて、其間特に宗教として別個の原理を挿入することを要しないのである」

「宗教の本質は個人的のものであつて、たゞ見方によつて社會的にも見ることが能きるまでゝある。」それであるから、宗教の社會化に意義があるのではあるまいか。宗教の社會化と云ふことは宗教それ自體が個人的意識を失つて社會化すると云ふのではなくて、社會が宗教化すること、精神化するの謂でなければならぬ。

(2) それ故、宗教は社會的のものであつて個人的のものでないとする考には同意することはできない。本質的のものとしては、やはり個人的であると思ふ。彼のロバートソン、スミス氏が、

「宗教は個人々々の超越的實在に對する任意關係にあらず、是れ團體の福利を念とし其法律と道德的秩序とを保護するの力あるものに對する團體全員の關係なり」(The religion of the Semites. p. 55)

とする見解は私の見方を裏切るものである。惟ふにスミス氏はセム系統の宗教に於ける神

人關係や、神のその社會生活に對する關係を考研した結果から歸納した觀念ではあるまいか。宗教が團體の法律と道德的秩序とを保護する力となる上に、その社會化活動が存在すると見ることは一應は首肯さるゝ樣であるが、よく吟味すると、その然らざることを發見する。假りに宗教が法律や道德の功果を保護することが本來の目的であるとすれば、法律、道德が宗教無くして完全にその機能が發揮された場合には、宗教は最早や無用のものとなるか。又たスミス氏の通りだとすれば法律や道德的秩序が重んじられず若しくば、ほとんど存在しない位の程度の蠻人の中には、宗教は存在しなかつたかと云ふに、否な、むしろ法律無く道德的秩序の見る可きものゝ無い原始人の間にも、宗教は宗教として現存することは吾人の知る處である。又たスミス氏の立場にあることは宗教の獨立性を辨へない考方である。私の云ふ意味は、道德や法律に宗教が附屬して或は關係して始めて、その活動が實現さるゝものとするの謬見を指摘するものである。換言すれば宗教は法律や道德を離れて、それ等以上の立脚地から獨自の活動を人生に發展するものであると爲すものである。

(3) 宗教が個人的のものでなくて、社會的のものであるとする立場にも色々の解釋を下す者

があるが、何れにしても私は贊同することに躊躇するものである。例へばデユルケイム氏の云ふ說に從へば、宗教的意識の對象卽ち神聖なる事物の本質的意義は實は社會其物の外にないとするから、人類が集團的生活を爲す所には必ず宗教があり、之に反して私的生活は卽ち非宗教的凡俗的生活であつて、從つて宗教的生活又は行事は、常に集團的でなければならぬと斷言するに至つたのである、(II, p. 76) 宗教的意識の對象は社會其物であるとか、宗教的生活は常に集團的であるとするデユルケイム氏は次の樣な宗政意識の發展の跡を何と見るだらうか。彼のイスラエル民族が種々の困難や迫害の時に、彼等及び彼等の先祖の不正、不義に對するヤーヴエ神の罰だとして、從順に、その苦しい生活の唯一の慰安とした集團的意識の生活の時代の方が、豫言者エゼエキエール (Ezekiel) が個人的宗教意識として懷抱した、その內容よりも宗教の本質に近いものとすることが能きるだらふか。卽ち。舊約全書、以西結書に、

「罪を犯せる靈魂は死ぬべし、子は父の惡を負はず、父は子の惡を負はざるなり、義人の義はその人に歸し、惡人の惡はその人に歸すべし」(同書18章20節)

となすエゼキエールの自覺よりも自己の不幸の境遇は祖先の不正の應報だとする集團的生

活の方がより宗教的だとすることが能きようか。宗教的意識は個人的自覺に近づけば近づく程、普遍的になることは宗教進化の正當の過程である。だから民族的宗教よりも、國民的宗教よりも、個人的宗教が普遍的妥當性を包含するものである。此の意味からする個人的宗教が成立すれば、茲に私が先きに述べた宗教的活動の社會化が普遍的になり、その功果は神聖のものとして普通の他の社會運動と別の獨自の意味と價値とを顯現する世界を建設することが能きる。如上の私の立場からして考へるとシェラース氏の云つた次の句に非常の味ひがある。

But, above all, religion must be catholic in its Count of values. (4, p. 223)

(4) 上述の私の論旨が是認さるゝとすれば、如此宗教的自覺から、個人的に或は團體的に(教會又は宗教的諸種の活動團體等)各方面に宗教的活動を起すことは自然の結果である。此の場合、信者として又は教會として己れのみ清ふし安んじて何等社會問題解決の運動に關與しないと云ふことは、神に不忠實であり、自己を欺く臆病者でなければ似而非なる信者である。然し先きの正當とする立脚地を忘れて唯だ徒らに社會運動に焦慮し、その事に沒頭することそれ自身が自己の本領とする時に、其處に、往々にして僞善者又は僞善團體の

輩出を見るに至り、神を虚榮の商品に濫用する樣な不敬漢もここに輩出するわけである。それなら、むしろ自ら退いて、その罪を懺悔したと稱するアラビアのハニフ (Hanyfs) の團體や第六世紀の初めに起つた南イタリヤのモント・カシノのベネディクト (Benedict of Nursia) の僧院生活の方が餘程吾々には懷かしさがある。

尙ほ社會宗教を認めたエドワード・アルスウオース・ロス氏すら次の樣に云つてをることは私の見解を保證するものではあるまいか。

「社會宗教は社會安寧に貢獻する所あるが爲めに歡迎せられ、扶助せられ、又便宜を與へらるゝと云ふことの萬一なくなりし場合と雖も、全く死亡すべきものにはあらず。社會宗教は同情、正義、義憤の如き倫理的感情より發芽して、此等のものは、外の純粹なる宗教的感情と相合して自己と他人との間には眼に見えざる結果ありとの信仰を起さしむ」(9, pp. 195-6)

(5) 最後に然らば宗教が奈邊に關して基本的社會原理として、その機能を有するかは、學者に依つて各々根據を持つてをるであらうが、私はハリー・ワード氏の見解は最も要を得たものであると思ふ。今同教授の說を見るに大體之を三點に歸してをる。

(1) The value of personality.

(2) The necessity of brotherhood.

(3) The law of service. (5, p. 334)

氏が宗教の社會的原理としては人格の價値を第一に擧げてをることは實に妥當の見解として認めむとするものであつて、私の最も原本的のものとする點である。第二は同朋主義。第三は精進或は奉仕の法則を示すものである。(つゞく)

參考書

1. Münsteberg, The elernal values. 1911.
2. Patten, The social basis of religion. 1912.
3. Peabody, The approach to the social Question. 1909.
4. Sellars, Tne next Step in religion. 1918.
5. Ward, Harry, The new social order. 1920.
6. ニルヴード, 社會問題の改造的解決(歸一協會)大正九年
7. 桑木嚴翼博士, 文化主義と社會問題(至誠堂)大正九年

8. 紀平正美博士，認識論(岩波書店)大正五年

9. ロス・エドワード，社會統制論(日本文明協會)大正二年

10. 左右田喜一博士，文化價値と極限觀念(岩波書店)大正十一年

11. 宗教研究會，宗教研究第二卷第五號

我國上代の遺物に現はれたる四神及十二支獸の宗教學的考察

津田敬武

余は先づ我が國上代の遺物に現はれて在る四神十二支獸の實例を擧げ、更に外國殊に我が古代文化と密接な交渉を持つ國に於ける其の類例をもとめ、其の意義と相互の關係を示し、最後に少しく宗教學的考察を下して識者の叱正を仰ぎたい、

明治二十四年上總國君津郡清川村字祇園山林内の古墳墓から兜、鎧、刀身、鐵鏃、裝具等が發掘れさた。此中、兜は金銅製で長徑六寸九分、中央部を巡つて十一體の動物を毛彫にして表たして居る。この動物の各が如何なる動物であるかを明かに知ることが出來ぬ。唯最も明瞭なのは双魚で、二疋の獸類は何かよく判らんけれども羊と牛の積りかとも想像される。其の他蛇形、虫形、鳥形などがある。さて全體として此の動物を如何に見るべきかゞ當面の問題である。他のすべてが不分明であつても双魚の存在から想像して十二宮と考定することが可能である。

從つて其の數は十一しかないが、十二支獸と同じ系統に屬するものであらう。要するに曆學上の獸帶zodiac に該當するものである。果して然らば獸帶を兜に彫刻するに至つた動機は何れにあるか。これを單に模樣とのみ見て然るべきであらうか。更に其の類例を研究して其の眞相を究むべき必要がある。(第一圖參照)

明治三十二年丹波國氷上郡石生村大字石負にある古墳から、馬具、鎧、刀身などゝ一所に二面の鏡が發見された。此の二面のうち一面の鏡背には三神三獸と獸帶の模樣がある。今此模樣を熟視するに中央の鈕座を中心として神像が三體、怪獸が三疋表はしてある。此內區を繞りて十個の素乳の間に双魚。天蝎其の他不明の動物が十體表はしてある。この獸帶中の不明なる動物とさきの兜に表はされて居る獸帶中の不明なるものと其形狀を比較すると又互に異つて居るが、十二宮と關係ある獸帶たるべきは同樣である。此と全く同式の鏡は尾張國東春日井郡不二村大字出川の古墳からも發見された(第二圖參照)此外少くとも尙ほ六七面は東京帝室博物館にも藏されて居る。

故京都帝國大學講師富岡謙藏氏の蒐集された古鏡の中に、伊勢國齊宮附近の古墳墓から發見されたと傳へられて居る流紋尙文四神鏡と稱するものがある。今其の背面の模樣を見るに中央

の鈕座の周圍に方形の輪郭がある。其の輪郭の周圍に十二支の文字卽ち子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の文字を配し、其の外周には花形の乳がある。其の間に四神其の他八物鳥獸などを配置して居る。こゝに四神といふのは東西南北の標象となつて居る所の靑龍(東)白虎(西)朱雀(南)玄武(北)を指すのである。龍の前面には圓郭中に日を表象せる三足烏の異形がある。又白虎の前には月を表象せる蟾蜍の畧圖が刻してある。朱鳥といふは雀の形に似て居る。他の場合には鳳凰の形を表はしたものが多い。玄武は龜に蛇の纏ひ付いて居る形であるが、これは蛇龜の交尾せる圖であるといふ說もある。更に此模樣の周圍を一周して左の銘文帶がある。

尙方作竟大母傷、巧工刻之成文章、左龍右虎辟非祥

朱鳥玄武主四彭、　子孫備具居中央、長保二親樂富昌

此の銘文中終の二句卽ち子孫、居の中央に備具して長く二親を保ち樂富昌なりと言へるは此種の鏡の用途目的を說くものである。又中間の二句、左の龍、及び右の虎は非祥を避け、朱鳥玄武は四彭を主ると言へるは四神の性質を述べたものである。十二支の性質については此銘文中に何事も言及して居ないが當時に於ける鏡の一般的目的から推察すると、四神と相似たる性質を有するものとして注意すべきものであらう。此の鏡とすべての點に於て全く同式のものが

大和國廣郡大塚村字新山の古墳からも發掘され、現に諸陵寮の所有になつて居る。尙ほ此等の鏡と同型にして其の原型とも認むべきものが支那からも往々發見され、現に諸家の藏品中に遺つて居る。この形式を有する模樣に共通なる點は、十二支と四神とを併せ表はして居ることである。而して十二支の文字は必ず方形の輪郭內に配置されて居ることは、更に一層の注意を以て見なければならぬ。此形式の稍々簡略化されたる模樣に於ては四神のみを表はし、十二支の文字を畧したものもある。然し此場合と雖も。中央の方形だけは矢張り殘つて居る。蓋し方形は支那の方圓思想に於て天を象る圓に對して地を表はすものである。卽ち十二支と地の標象たる方形とに或る重要なる關係を意識して構圖されたものと思はれる。

十二支との關係に於て大和國元明陵の隼人石（ハヤトイシ）と稱するものも見逃すべからざる遺物である。大和國添上郡佐保村大字法蓮字大黑ノ芝に聖武天皇の皇太子を葬れる那富山の墓がある。徑三四間、高さ四五尺の圓形盛土の墳墓で、其の四隅に各一個の自然石がある。其の西北にあるは高さ三尺五寸許で一本の杖を突いて立てる獸首人體の立像が彫刻され、其の頭上には北の一字が刻してある。西南にあるは高さ二尺許、其の面には略ぼ前者と同樣の獸頭が彫刻してあるが、胴部以下は明瞭でない、東南にあるは高さ二尺餘、獸頭人體の彫刻あることは認められるが磨

損して圖樣が明でないが、頭上には東の字がある。東北にあるは高さ二尺許、嘗ては彫刻のありしものと認められるが今は其の圖形を識別することが出來ない。

さて此の異樣なる獸頭人身の裸體彫刻に就いては疾く世人の注意を惹き、古來元明陵の隼人石或は七疋狐と稱せられ、學者のこれが考說を試みたものも少くない。就中注意すべきは、伴信友の隼人說である。其の說く所は日本書紀延喜式等によつて隼人が宮廷を衞り、元日、卽位、蕃客入朝等の儀を擧ぐる時に吠を發するの事あるより、天皇の陵墓にも此像を置いて奉仕の狀を示すものであるといふ。此說は隼人が吠をなすと言ふことゝ此獸頭人身の形が犬に似て居る所からして、聯想した臆說に過ぎない。要するに聽くに足らざる說である。

然るに柴田常惠氏は明治四十二年十二月東京人類學雜誌上に於て舊說を排して此の獸頭人體の彫刻は隼人を現はすものにあらず、方位に配して十二神を刻せるものにして北は子にして卽ち鼠、東は卯卽ち兎、西は酉にして卽ち鳥を示し、其の體部を人體となせしものなりと斷定して居る。從つて此獸頭人身の石像は其のはじめは十二個存在せしものと認めるのである。更に氏は此說を證明するために海東金石苑から朝鮮に於ける唐代の實例を引用して居る。余輩は此の說を以て正鵠を失はざるものであると信ずる。

今海東金石苑卷二を見るに新羅の角干墓及び掛陵の十二神像の圖を掲げて居る。角干の墓にあるは高さ二尺四寸廣さ一尺三寸とある。先づ十二支獸の圖を擧げ圖像の終に說明して曰く

右十二神畫像、在朝鮮慶尙道慶州府西岳角干墓前、案角干新羅官名、象凡十二石、每石畫一神蓋十二時生肖也、神人身獸首、手執一兵器狀頗猙、蛋無年月題字以其角干墓故、定爲唐時所建、

と此の十二神像は現に尙ほ存在して居るのである。今其の一を第四圖に示す。又新羅掛陵十二神畫象の高さは一尺四寸九分、廣さ一尺七寸とある。又其の終りに說明を加へて曰く

右十二神畫像、在朝鮮慶尙道慶州府掛陵、案東京雜記云、俗傳葬於水中、掛柩於石上、爲陵故名掛陵、象爲十二時生肖、神亦人身獸首、手執兵器、無年月題字、與角干象大同小異、金秋史定爲新羅時古刻。

と。慶州は卽ち新羅の王都で此等の古墳は海東金石苑の言ふ如く唐代を降らざるもので其の十二神像は我が獸首人身の像と同時代に屬するものである。從つて又其の性質も同じであるべきは既に疑ふべき餘地がない。又今西龍氏の調査によると、高麗諸陵墓の遺蹟中に十二神を彫刻した屏石を陵墓の周圍に繞らしたもの、又其の證蹟あるものなどを合せると十三陵もあるとい

ふ。(朝鮮總督府大正五年度古蹟調査報告二八三頁參照)

此の外、高麗時代の鏡には角干の墓石にあると同じ樣式の獸首人身の十二支獸を現はしたものがある、この種の鏡は金石索にも出て居るから、唐代から支那に行はれて居つたことゝ信ずる。

高勾麗時代平安南道平壤附近の古墳の壁畫にも屢々四神の圖が畫かれて居る。梅山里に四神塚と稱する圓形の墳墓が丘陵の上にある。其の玄室は高勾麗時代の墳墓に通有なる天井がある此の天井及び壁には漆喰を塗り四神圖及び文樣を畫いて居る。卽ち北になつてて居る後壁には主人公及び妻妾と思はゝ者、並に牽馬の人物、玄武等を描寫し、東壁には蒼龍及び騎馬人物を、西壁には白虎及び狩獵の圖を描き、南面入口の右には朱雀、卽ち雙鳳をあらはして居る。更に東西の壁上には日月の象を相對せしめ、北壁上には北斗の圖がある。又遇賢里の大墓と稱する古墳の玄室內には、木棺の臺石と思はるゝ石床が二個安置されて居る。而して其の四壁には同じ四神の圖が描かれてある。此の壁畫の手法は支那南北時代の樣式を發揮して我が飛鳥時代の者と最も親密なる關係を示して居る。又同所に此の大墓に對して、中墓と呼ばれて居る古墳內玄室の四壁にも、四神の圖が畫かれて居る。(朝鮮古蹟圖譜第二卷參照)

さて此等の古墳のある地方卽ち平壤の地は長壽王の十五年(西曆四二七)に都を遷した所で、其後寶藏王の二十七年(西曆六六八)唐に亡ぼされるまで、前後約二百四十一年の間成熟せる高勾麗文化の中心であつた。隨つて我が國に高勾麗時代の遺物と同系統の遺物の存在して居ると言ふ事實は、我が國が彼より學ぶ所ありしを語るものである。

此等の古墳よりは時代が降るけれども、高麗時代卽ち西曆十世紀頃の石棺が四個東京帝室博物館にある。何れも四方の側面に四神の圖が陰刻してある。今其の中の一例について少しく詳細に述べると、前面は表に玄武、裏に蓮花、後面の表は朱雀、其の裏は蓮花、左側面の表は青龍裏は蓮花右側面の表は白虎其の裏には同じく蓮花が彫刻してある。又蓋石の表面は四隅に唐草を彫り其の裏には北斗七星が彫刻してある。

支那で最も著しい四神十二支獸の遺物は漢代の鏡であるが、我が國の古墳から發見される古鏡中の四神獸帶の模樣を有するものは、支那から輸入したものか又は我が國で模鑄したものである。

支那某所で發掘された杜長史妻薛氏の墓誌が往年早崎梗吉氏によつて支那から將來され、現に東京帝國博物館の所有に歸して居る。此の墓誌は石製で方一尺三寸六分厚さ二寸五分ある。

其の表面に刻された墓誌は唐の顯慶三年(西六五八)十二月に刻したものである。而して此方形の墓誌の四方の側面には各面に三獸づゝ十二支獸が彫刻してある。又此墓誌には屋根形の蓋石があつて其の四方には四神卽ち靑龍、白虎、朱雀、玄武の四禽が彫刻してある。

滿洲歷史地理第一卷所載、白鳥、箭內兩博士の『漢代の朝鮮』に於て玄菟郡といふ郡名の解釋に及び、其の玄菟郡は、東方に位し、十二支獸の中、兎の方角に當るが故に玄菟の名を得たるにあらざるなきかを疑ひ、此問題は十二支獸の起原に關係し、文化史上より見て大なる興味ある問題として詳細なる解釋が試みられて居る。朝鮮半島の地名の中、十二支獸の方角に當れるものが獨り玄菟郡のみでなく、其南方に位する三韓國の名稱が、亦十二支及ひ十二支獸の方角に合へるが如く思はれるからして、玄菟郡が十二支獸の中の兎を以て其の名稱に加へたることの疑ふべからざる所以を力說されて居る。さて朝鮮の地名に十二支獸の名を用ふる其の動機が單に方向を示すのみでなく、他に何か宗教的意義が伴つては居らぬであらうか。此は又一の興味ある問題である。

十二支のことは、旣に史記の律書に出て居るのであるが、十二支とは言はずして十二子と言つて居る。此は十干卽ち甲、乙、丙、丁、戊、巳、庚、辛、壬、癸を母として十母と稱したからし

て此に對して十二子と呼んだものと思はれる、要するに十干を母となし十二支を子となしたものである。干は天に屬し、支は地に屬すといふ說を立てて干支を陰陽に結び付けて居る。卽ち十干は天運に屬する木火土金水の五行を更に陰陽に配したもので甲丙戊庚壬の五をば陽とし、乙丁巳辛癸を陰とし、且つ甲乙を木、丙丁を火、戊己を土、庚辛を金、壬癸を水に配したのである。尙五行には相生相尅と云ふことがある。卽ち木の火を生じ、火の土を生じ土の金を生じ、金の水を生じ、水の木を生ずるは事物の生ずる順序である。玆に木火土金水なる循環を來し、萬物が相生の序を得て安きを得るのである。然るに之に反して此の五行の順序を一つ置きにして、水火金木土とすると水は火を尅し、火は金を尅し、金は木を尅し、木は土を尅し土は水を尅するものとなつて萬物序を得ぬ。之を相尅と言つて忌むのである。次に十二支の方は地氣に屬するものを考へられたのであるが陰陽に配すること各六、卽ち子寅辰午申戌が陽で、丑卯巳未酉亥の六が陰である。更に又五行にも配するのである。之を要するに十干と十二支とを組み合せて六十の週期が出來て居る。これが所謂干支で、我が國に於ても支那の曆を採用して以來歷史上の記錄には年月日を記する外に此干支を附記して來たのである。干支の起原が河圖、洛書にあるといふやうな說もあるが、兩書とも勿論後人の僞作であるから取るに足らぬ說

である。

支那では一日を十二等分して、夜の十二時を子、午前二時を丑、午前四時を寅、午前六時を卯、午前八時を辰、午前十時を巳、正午を午、午後二時を未、午後四時を申、午後六時を酉、午後八時を戌、午後十時を亥として定めたのである。かくの如く一日を十二時に分つ風習は太初元年卽ち西紀前一〇四年に發布された太初曆頒布の前後であるといふ說があるから干支の使用は可なり古いことである。

支那に於ける十二支獸を十二支卽ち十二宮に配したのは何時頃であつたであらうか。先に引用した『漢代の朝鮮』に說をなして曰く、『十二支獸の事は前漢以前の記錄に絕えて其形跡を認めざるを以て之を察するに、此制は外國傳來にして漢人自身の創作にはあらざるべし。思ふに漢は武帝の時に西域諸國と交通し、其の文物を採用して曆法などにも大改革を行ひたれば、十二支獸を十二支に配當せしも亦此時にあるべきか』といつて居る。

後漢書地理志に『凡天有十二次日月之所躔也、地有十二分、王侯之所國也、故四方方七宿四七二十八宿、合一百八十二星、東方蒼龍三十二星七十五度、北方玄武三十五星九十八度四分度之一、西方白虎五十一星八十度、南方朱雀六十四星一百一十二度云々』とある。これによるも四神

は天に屬する方向の標象であると共に、十二支は既に說ある如く地に屬するものであるから、四神と十二支獸との關係は天の方角と地の相との關係であるべきことが察せられるのである。

十二支獸は支那で創作されたものでないと言ふ說が多いのであるが、Boll 氏曰く獸帶は元來 Chaldea 人の創作に係り、Babylon 人が十二星を表はす符號で赤道時日、年月の十二分を示すに使用したものを Egypt の占星家が之を本國に傳へ、本來の十二獸に代へて自國人の尊崇する靈獸十二神を以てしたのであらうと論じて居る。(漢代の朝鮮所引)

R. Friedrish 氏は蘭領印度 Bali 島の記事に於て其の土人の曆のことを述べて次の如く言つて居る。

Baliness 曆の單位は三十五日で一年は其の六倍卽ち二百十日間である。三十五日各其の星宿 Constelletion を持つて居るが、それは又善惡の性質を標示し、而して其の善惡の性質は土人にとつて重要な關係を持つて居る。此星宿は歐洲や印度のそれとも異ひ Orion と Pleiades を除くと其の記號は寧ろ獨斷的に定められて居る。さて其の星宿は日の吉凶を定め、その星宿は其の日に生れた人の中へ這入るものと想像されて居る。ギリシヤ古代の獸帶は十一で天秤宮 Scales が缺けて居る。而して Scales の起原はサソリの爪であると言ふことも想像されて居つた。尤も

それが東洋又はエジプトから輸入されるときに缺けたのであるか、或は初めから十一であつたか、此點は明かでない。』The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britaion and Island, New Series Vol. X—an account of the Island of Bali. p. 96)

と、要するに支那の十二支獸は、印度其の他西方亞細亞地方に於ける獸帶と互に關係を有するのみならず、ギリシャの獸帶にも親密なる關係があるからして、支那十二支獸帶の關係する所は甚だ廣い。さて支那で十二支獸を十二支に配當するやうになつたのは、外國からの影響のみと見るべからざるもので、支那在來の靈獸が輸入曆の獸帶と接觸して陰陽說によつて構成されたものと思はれる。

此の研究の目的である四神十二支獸の宗教的意義を知るべきためには、尙四神十二支獸が佛教に於て如何に現はれて居るかを研究しなければならぬ。

藥師瑠璃光如來本願功德經に十二神將のことが出て居る。これによると十二神將は藥師の十二上願によつて示現したる羯磨身で晝夜十二時の守護神であつた。故に子の時を守護する神の頂上には鼠の形を安んじてこれを示し寅の時を守護する神の頂上には虎の形を置いて標示するのである。今覺禪鈔によつて其の各の形狀について概略を述べる。第一の宮毘羅大將は身赤色

にして忿怒形をなし、冠上に鼠(子)を置き、左手は伸べて招くが如くし、右手に索を持つて居る。第二の伐折羅大將は身青色、忿怒形にして頭髪聳え上り、頂上に牛(丑)首を載き、左手に弓を執り、右に箭を持ち將に弓を彎かむとして居る。第三の迷企羅大將は身赤色、忿怒形にして頭髪聳え上り、頂上に虎(寅)を載き、右手に斧を持つ。第四の安底羅大將は身赤色にして大忿怒形を作し、頂は兎首を置く。第五の安儞羅大將は身白色忿怒形にして頂上に辰(龍)首を載く右手に劍を持ち左手に鞘を握り、走つて敵を擊つ勢を爲す。第六の珊底羅大將は身赤色、忿怒形にして直立し、頂上に蛇(巳)首を安置して居る。第七の因陀羅大將は身赤色忿怒形にして兜上に午(馬)首を安置して居る。第八の波夷羅大將は身白肉色忿怒形にして頂上は未(羊)首を著けて居る。第九の摩虎羅大將は身青色にして少しく忿怒形である。頭髪は赤色にして上に聳え、頂上に申(猿)首を著けて居る。第十の眞達羅大將は身青色笑怒の相にして頂上に酉(鷄)首を置いて居る。第十一の眞達羅大將は身青色、笑怒の相にして頂上に酉(鷄)首を置いて居る。第十二の毘羯羅大將は身の招杜羅大將は身赤色、忿怒形にして冠上に戌(犬)首を置いて居る。

青色、忿怒形にして頂上に亥(猪)首を著けて居る。

又北斗曼荼羅には龍龜虎鳳を東北西南の四方に畫き佛道守護の靈物として居る。

奈良藥師寺の本尊藥師如來の像は天武天皇が皇后の眼病平癒を祈られたるために發願せられ其の後皇后が卽位になつてから鑄造せしめられたのであるが、此本尊の臺座にも四神の圖が彫刻してある。卽ち佛法守護のためである。

已上諸種の實例を考察すれば我が上古の鏡、其他の遺物に現はれて居る四神及び十二支獸の宗教的意義は自から明かであらうと信ずるが、四神卽ち龍龜虎鳳の四禽を以て二十八宿の四方に配するに至つたのは、印度であるか支那であるかも十分明かでない。けれども、二十八宿を設定する目的は黃道上に於ける太陽の位置を推定して季節を定めるが爲めである。其の二十八宿を四方に分けて東西南北に四禽を配當して標象するやうになつたのは、蓋し宗教的動機によるものであらう。既に說明をして置いた伊勢國某所の古墳から發見された鏡の銘文に龍虎は非祥を避け、朱鳥玄武は四彭を主るとあるも、皆守護の意味を現はしたものである。漢書禮樂志にも倉龍白虎を注して衞なりと言つて居る。按ふに四禽は古來支那の民間に於て信仰の對象となつて居つたものが漢代に曆の編成される際、陰陽思想と結び付いて天の四方を示すべき標象に使用されたものと信ずる。從つて此等の四禽は古來支那に於て靈獸靈鳥として信仰せられて居つたものと考へるのである。これを古墳墓內の四壁或は棺の四面に畫くことは、死者をして其

歸すべき北方極陰の方位に正しく向はしめると同時に四神をして其死者の遺骸を永遠に守護せしむるといふ思想のあつたことゝ信ずる。此外墓相を重んずる所の風水說などにも關係があらうと想像される。

既に類集して說明を加へた四神十二支獸に關する信仰は原始宗教思想の社會的に發達した法則につき何ものかを教ふる所はないであらうか。これについて凡そ三種の原始宗教思想の現はれを見ることが出來るであらうと信ずる。卽ち方角、時間の觀念、及び神の形等に關する原始的宗教思想を見ることが出來るであらう。

方角が日常生活に重大なる關係あることを意識し始めたのは、餘程古い時代のことであらうと思はれる。而して先つはじめに方角を定める標準となつたものは太陽であつたと思ふ。東から昇つた太陽は必ず西に沒するいふ現象を常に繰り返して居る。この目前の事實は原始人の注意をひどく惹ひたに違ひあるまい。そこで先づ最初に考へ付いた方角は東西でなければならぬ東西が定まれば其を標示すべき記號が自から必要になつて來る支那人は太陽に三足の烏が住んで居ると想像して圓形の中に三足烏を畫いて太陽の記號とした。又西は月の記號卽圓形に蒐と蟾蜍を畫いた圖によつて標象するやうになつた。月の標象を西にあてはめるやうになつたのは、

陰陽思想の發達した後、太陽を陽となす思想と相對して生じたものと思ふ。この外東西の標象に青龍と白虎のあることは既に述べたが、何れが先きに現はれた記號であるか明かでない。何れも漢代には既に廣く用ひられて居つた。東西が定まれば南北は自から定まるわけて、其記號は既に言つたやうに朱雀と玄武である。東西たげでは不十分であるから、更に十二等分して十二支を四神の方角に配當したものであらう。既に言つたやうに十二支に動物を配當したのは既に或信仰の對象になつて居つたものが充當されたことであらう　從つて此の思想は各の方角に或超人的神の存在を想像し、この想像と動物崇拜の思想が結び付いて出來上つたものであらうと思ふ。故に幸福な生活を送り得るやうに方角の神を祀つて其の怒りに觸れぬやう、又積極的に其の守護を求めやうとする念の起つて來るのは自然の發達經路であらう。獸帶十二支獸を兜や鏡などのやうに戰時や日常使用するものに現はし、又死者の冥福を祈るために墳墓の周圍や壁面は又は墓誌の四方側面などに現はしたのも此の想像から出たものと考へられる。方角に關する思想は佛教に於ても非常に重んぜられて居る。殊に佛教の儀式に於ては、なか〳〵やかましい秘密儀軌が出來て居る。例へは最も普通に行はれる五佛の配置を見ても青龍、白虎、朱雀、玄武と、其の方角及び色の配置が全く一致して居る。卽ち中央は大日如來で黃色を配し、東は阿

閼如來で青色である青龍の青と一致して居る。南は寶生如來で赤、西は阿彌陀如來で白、北は釋迦如來で黑色といふやうに其の色と方角が互に一致して居る。

方角が天文から起つて居る關係から曆と方角に關する迷信が結び付き、古來日本人の日常生活を甚しく左右して來た。旅行するにも、移轉するにも、必ず先づ方角を見なければ決定し得なかつたのである。今日と雖も尙可なり大なる餘勢を留めて居る。明治以後神宮から出る曆には全然此種の記載は除かれたが、民間には尙九星便覽の類が行はれて居る。これは現に活きて居る社會現象として注意しなければならぬ。

時間の觀念は天體の觀測から起つて來るもので、人類の社會的生活とはもとより、其の宗教的生活とも密接の關係あるは、古代のバビロニアやエジプトあたりに於て、天體の觀測が僧侶の仕事の一部であつたことに徵しても明かなことで、かくの如きは時間の觀念が如何に人類の社會生活に必要かくべからざるものであつたかゞ想像される。さて原始的獸帶十二支獸は時間の觀念と最も深い關係を持ちつゝ天體の觀測に起原して居るのである。從つて人の生れる時に其の日の星が人體に入り、其の星の吉凶によつて運命が定まるといふやうな思想、即ち生れた日の善惡に關する迷信の類は、人類の共通的思想であつたと思はれる。日々偶發する吉凶禍福

に對して人力の及ばないといふ思想は、方角の神を必要とする以上に、時間の神の必要を感ずるから十二支獸が晝夜十二時の守護神として佛教に取り入れられて居るのは、最も自然である而して時を司る十二神將が方角の神と同一であることは、時、方角何れも天體の觀測から生れた思想であるからであらうと信ずる。

神形に關する思想が動物其まゝの形から獸頭人身に變じ、更に佛教の十二神將に於て頭上の徽章に變化したことは、人智の進むにつれて、其の要求する神の形像と其の屬性に變化の生ずる有樣を語るものではあるまいか。

方角時間、及び神の形等について原始的宗教思想の發達を四神及十二支獸の方面から考察したのであるが、我が上古卽ち古墳時代に於ては天地或は男女等に對する考察から發達したものと思へる支那の陰陽及び方角の思想と、萬有を木火土金水の元素に分析して解釋せんとする五行思想によつて、此等の原始的宗教思想が統一されて居つた。卽ち原始時代に於て雜駁な信仰對象であつたものが、陰陽五行の哲學的考察によつて統一ある形式を得、それが更に佛教に入り、はじめは獸首人身の像となり、更に人格化され、十二神將の如き像となり、其の原始的意義の變化せし有樣を像形の上に表現して居る。

要するに四神十二支獸が社會的に表現されたその沿革は、人類の社會生活に於て其の力の及ばさる方面を補償して滿足を得んとする Compensation theory の現はれと見ることが出來るであらう。

日本に於ける佛教史家の先驅並に其の著書

大屋德城

一

佛教史の撰述は印度に於いて之れありしや否や、余輩寡聞にして、未だ之れを識らず。支那に於いては、文字の國なるだけ、斯る方面に於いても、幾多の撰述あり。梁寶唱の名僧傳、同慧皎の高僧傳、唐道宣の高僧傳、宋贊寧(等)の高僧傳は單に傳記の集錄に過ぎされども、宋志磐の佛祖統紀の出るあり。特に其の法運通塞志の如きは編年體に則ると雖も、又古今の變遷を叙して、頗る簡明なるものあり。未だ通史と稱するを得ざらんも、亦一個の體裁を具備するものと謂ふ可し。元念常の佛祖歷代通載亦一篇の佳作たるを失はず。

二

翻て之れを我が日本に觀るに、僧傳の編輯は之れを奈良期に觀ることを得ず。平安初期に始めて日本國現報善惡靈異記三卷の撰述あり。こは藥師寺景戒の編するところにして、景戒は傳詳かならず。而も唐土の冥報記、般

若驗記等に摸して作れるもの、固之れ一篇の因緣集にして、僧傳の集錄にも、編年體の通史にも非るなり。次で、延曆年中鑑眞門下に依りて、戒律傳來記、延曆僧錄の出るあり。前者は豐安の撰にして、元三卷あり。今上卷のみを存す。而も戒律宗流傳の顚末を叙するのみ。後者は元*五卷あり。思託の撰にして、今遺して完本を觀ずと雖も、僧傳の集錄にして、正しく梁唐の僧傳に倣ひしものなる可し。而して、豐安も思託も唐人にして、日本人に非ず。

斯くの如く考へ來る時は、我が國に於ける僧傳の編輯は延曆僧錄に始ると雖も、こは唯僧傳の簡單なる編輯に止り、未だ謂はゆる通史と稱するものにあらず。其の之れあるは遙に後世の事に屬す。唯此の頃には、眞人元開の鑑眞和尙東征傳、仁忠の叡山大師傳等個人の傳記の二三現はれたりき。若し夫れ光定の一心戒文を加ふと雖も、未だ通史の出現に接せざるなり。

*延曆僧錄の卷數に就ては異說あり。宗性の日本高僧傳要文抄には延曆僧傳の第三を引用收錄すれば第三卷迄ありしは確かなり。然るに大正八年余輩が初めて發見したる山王院藏書目錄（密部の奧には、延長三年僧貞素書僧空禁記とあり）に依れば、目錄一卷本文五卷ありしことを知る可し。「山王院藏」に云く。

延曆僧錄五卷　唐沙門思託
延曆僧錄目錄一卷

三

我が國に於いて古來佛敎通史の最古最秀なるは東大寺凝然の三國佛法傳通緣起三卷にして僧傳の最舊最夫なるは東福寺虎關師錬の元亨釋書に過ぐるものなしと思へり。げに其の文章に於いて、體裁に於いて、兩者は幾多の類書

中に頭角を抽き、且つ其の流傳の廣汎なる、爾く思惟せらるゝの失當ならざるに似たりと雖も、若し此の說を以て、事實其の物なりといはゞ、恐らくは識者の首肯を得ざる可し。延曆僧錄以後、僧傳に於いても、多くの往生傳の平安朝に續出するあり。又單獨の傳記も少からず。されば、元亨釋書に至りては、其の部帙の大は之れより先き、及ぶものなしと難も、類型は既に之れあり。然るに、三國佛法傳通緣起の如き通史の體裁を具ふるものに至りては、未だ其の例を知らず。日本に於ける佛教史家の名譽を凝然に歸すること古今皆然らざるはなし。

四

近年東大寺尊勝院の秘庫開らかれて、宗性抄錄するところの古鈔世に出づるや、其の遺鈔の多量にして、且つ就て鈔せし原本の逸せしもの少からざるに考へ、更に宗性が凝然の先輩にして、師弟の關係の繹ぬべくあるに準據し、宗性を以て凝然の先驅者とし、歷史的方面の著作の如き、凝然の宗性に倣ふもの少からずと說く人なきに非ず。之れ固より一面の眞理なる可きも、例へば宗性の日本高僧傳要文抄の如き、三國佛法傳通緣起の先驅なりと考ふるあらば、聊か失當の見たるを免れず。要文抄は其の識語に示すが如く、多くの個々の僧傳に就いて、彼此を抄し來りて、數卷と爲しゝものにして、未だ始めより「日本高僧傳」なる一個の成書ありて、夫れに就いて所要の個處を抄し來りしにはあらず。卽ち多くの僧傳の一部を抄し、そを集め來りて、此に一個の鈔錄書たる「日本高僧傳要文抄」が出

來たる譯なり。されば未だ始めより高僧傳あるにあらず。併しかくして出來たる要文抄は僧傳の集錄といふ點より觀て、或は元亨釋書の先驅なりといふを得んも、未だ三國佛法傳通緣起の先驅なりとは稱することを得ざるなり。

※日本高僧傳要文抄(三帖)が從來世に存せし諸の僧傳の要文を抄出して、一書に錄成せしことは、要文抄に伴ふ指示抄(一帖)に依りて明かなり。卽ち指示抄の首に列する僧傳の名は實に左の如し。

弘法大師傳上下　禪林寺僧正傳
書寫上人傳　靜觀僧正傳
淨藏傳　陽勝仙人傳
傳敎大師傳　慈覺大師傳
智證大師傳　無動寺大師傳
尊意贈僧正傳　慈惠大僧正傳
池上阿闍梨傳　音石山大僧都傳
增利僧都傳

其の奥に錄成の由來を記して云く。

建長元年自秋至冬於東大寺知足院別當信願上人御房御菴室披見日本高僧諸傳記之次爲止後見之煩聯示主要之事畢願以此右筆之功正彼上生之緣而已

華嚴宗末葉法印宗性
年齡四十八
夏臘三十六

又要文抄の各帖にも其の錄成の由來を示す奥書あり。卽ち第一卷は建長元年七月四日より信願上人の房にて抄し、十月五日に成り、第二卷は同樣にして、七月晦日に成り、第三卷は同三年十月一日實弘の房にて成る。されば第二卷、第一卷、第三卷の順序にて出來しなり。第一卷の奥書に云く。

建長元年己酉十月五日巳時於東大寺知足院
所信願上人御房御菴室抄之畢
抑宗性自去七月四日至今時南北往還之際身心
淸淨之時連々參籠此幽閑之勝地所々抄出諸傳記之
要處畢是偏爲忍先賢之遺德爲勸後昆之修學也願以
之爲慈尊値遇之業因願以之爲出離得脫之芳緣而已
今日忽出此禪室欲還尊勝院之間惜別儘悲之餘右筆
記錄之矣

華嚴宗末葉法印宗性
年齡四十八
夏臘三十六

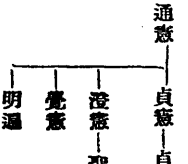
即ち「拔見日本高僧諸傳記之矣」といひ、「抄出諸傳記之要處」といひ、其の間の消息を洩せるものといふ可し。要するに、別に「日本高僧傳」と稱する一の成書ありしにあらざることは明かなりといふ可し。

五

以上說くところを以て稽ふるに、凝然は佛教史特に通史に於いて、日本空前の佛教史家と稱す可きが如し。

然るに、此に一新事實の發見せらるゝありて、斯る斷定の聊か早計に失することを立證するの機運に向へり。他なし。「三國傳燈記」と稱する佛教通史の既に平安朝末に於いて撰述せられて、其の零本の今に遺存せるを知れり。而して、其の撰者は興福寺の學徒覺憲其の人なり。

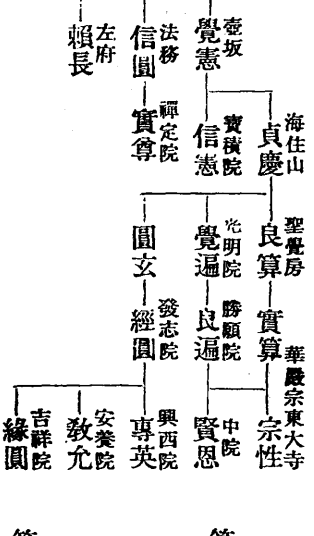
覺憲は通憲の子にして、學を藏俊に受け、因明に詳に、大和の壺坂寺に居り、後、興福寺寶積院に住す。建曆二年十二月二十七日八十二歲にして寂す。其の傳記は本朝高僧傳卷第十三淨慧二之十に出づ。今俗系を案ずるに、尊卑分脈にみゆ。（南家貞嗣卿流を抄出す）



即ち通憲の子にして、說教師として一代に鳴りし澄憲、隱者として有名なる明遍とは同胞にして、解脫上人貞慶には叔父なり。以て其の家系が學問に緣故の深きを知る可し。

又法系を案ずるに、凝然の律宗綱要（卷下）律宗瓊鑑章（第六）等に律に關する系統の中に其の名を列すと雖も、もと因明唯識を以て宗とする人

なれば、其の方の系統を以て主とせざる可からず。今興福寺所傳の因明系圖を摘錄すれば、左の如し。（大乘院所傳）



其の著すところ因明抄五帖あり。師藏俊の說を錄するところにして、古寫本あり。興福寺に傳ふ。各帖の奧に其の旨を記せり。第一に云く。

已上三重對隨受師說粗注之畢

仁平四年十一月八日於寶積院房注之了爲今年慈恩會之立義之耳　沙門覺憲

建保三年乙亥四月廿五日書寫了　良算

第二に云く

久安元年十一月日抄畢　覺憲

建保三年五月中旬比雇同法良俊院同書寫了同月卅日校正了　良算

第三に云く。

仁平四年九月廿二日於寶積房抄了爲宛慈恩會之立義也　覺憲

建保三年十月十七日以寶積院御草本寫之了以之爲興隆佛法之一條矣　末學良算

第四に云く。

建保三□十月廿一日雇同　同書寫之本是壺坂權僧正慈恩會御竪義之時受菩提院贈僧正之口傳令記給了去九月下旬之比自政所賜彼御草親寫之耳　末學良算

第五に云く。

久壽元年十二月二日在寶積房注之了　覺憲

建保三年乙亥五月下旬比以御草本親書寫之雇同法良俊院令書寫了

抑此抄者壺坂權僧正慈恩會御竪義之時受故菩提院贈僧正

之口傳所草給也云々相承之趣以之可知由有其仰親自賣積院所賜也貴重々々勿許外見矣　末學良筭

覺憲が屢公請に應ぜしこと、東大寺に佛開眼供養の導師と爲りしこと文治元年八月廿八日、興福寺別當に任ぜしこと文治五年五月廿八日等日常の擧動に就きては、興福寺々務次第、同三綱補任、三會定一記、東大寺續要錄、法中補任、玉葉、法勝寺御八講問答記、維摩會記錄撰要抄、東寺長者續紙、密宗年表等に散見すれども、繁に亘るを以て、總て之れを省略したり。

六

三國傳燈記はもと三帖ありしものゝ如く、余輩の知れる日本の部を述べたる一帖の表紙に

三帖內

とあるを以て之れを推知す可し。然るに、寡聞なる余輩は未だ上中の二帖を觀ず。唯僅に日本の傳燈を述べたる第三帖を一覽するを得たるのみ。故に數年來上中の二帖を搜索すれども、未だ獲ること能はざるは誠に遺憾とするところなり。希くは博雅の士上中二帖の所在を示し給はゞ、余輩の喜び何物か之れに如かん。

右の事情なれば、今僅に第三帖のみを以て論を進めざる可からず。第三帖は表紙に、

三國傳燈記下

と中央にありて、右に

三帖內

左に藏者の名の如き文字あれども、墨色薄れて判讀に苦しむ。而して以上の三行は本文書寫と同時の筆なる可く、更に右の下方に、

傳光曉

傳光祐

と各別筆の文字あり。此れ傳持者の名なること明かなり。又表紙裏に、

傳印覺

と又別筆にて署名あり。之れ亦傳持者なり。而して本文の奥に云く。

承安三年八月九日微僧覺憲奉爲
我寺本願聖靈勤行一座講莚用此
愚草畢其間之訛謬退可糺之云々
講師覺憲問者信憲同廿日書寫之信憲

以上は本文と一筆なり。次に別筆にて、

永祿七年甲子三月十四日從胤繼律師御房相傳之　光祐

と一行の記あり。之れ表紙の光祐と同一なる可し。

今之れを書風幷に墨色より考ふるに、本文と表紙の書名等の三行、奥書の四行とは同一筆にして、光曉以前の古寫なること明かなり。

次に傳持の光曉は興福寺に明德、應永の頃、光曉あれば其の人なる可く。永祿の光祐は未だ考ふるところなしと雖も、恐くは胤繼と共に興福寺の人なる可し。

以上考ふるところに依れば、右の三國傳燈記の下卷一帖(粘葉本)は覺憲が承安三年に興福寺の本願鎌足公の爲に、一座の講莚を勤めし時草せしものにして、而して、近時興福寺一乘院家の舊家臣影山氏の家より出でたりと稱するを以て考ふるに、維新の頃迄は一乘院家に傳はりしものなる可し。

師蠻は本朝高僧傳に覺憲を傳して、其の終に、覺憲が三國通鈔なる書を作りて、弟子に授けたりとて、左の如くいへり。

憲略ニ紬八宗大綱一勒ニ成三國通鈔一以授ニ門弟子等一

三國通鈔とは恐らく三國傳燈記のことを傳聞

して記しゝなる可く、而も八宗の大綱を記せるが如く記載せしは、其の書を覽ざりしことを語るものには非るか。考ふ可し。

七

三國傳燈記上中二帖は未見に屬すれば說明すること能はず。今下に就て、其の內容を通覽するに、欽明天皇の朝佛敎傳來に筆を起して、國土と時代を料簡し、末代特に佛法を護る可く、四衆共に信智を欣す可き事を述べたり。卽ち、

國土料簡
時代料簡
末代殊可護佛法事
四衆共可欣信智事

の四段あり。終に

廻向旨趣　所句　廻向

の一段ありて、一篇を結べり。而して、護命之釋、西域記、蓮華面經、祇園精舍碑、无性攝論、辨中邊論、增賀上人夢記等を引用せり。

前段は日本に於ける佛法流布の大要を叙し、時代料簡に於いて、末法の世に入らんとし、鬪諍堅固の狀態を歎じ、後段定慧入唐より談山建寺の事情を述べたり。固より豐富なる史料を用ゐて、精叙したるものに非ず。三國佛法傳通緣起の整へるに比す可からずと雖も、三國傳燈、佛法流布の大綱を叙せし意匠は、彼に先んずること遠きを以て、日本に於ける佛敎通史の萠芽此にありといふも、何人か之れを拒まん。他日上中二帖を一覽するを得ば、又改めて內容を批評せんと欲す。今は唯凝然の先驅者として、覺憲に三國傳燈記の作ありしを紹介すれば足れり。

（大正十一年十一月十二日夜於貧茂園筆）

學界彙報

京都印度宗教學會十年三月例會兼謝恩會、新卒業生送別會

本年度卒業生

木村喜堯(印哲)藤井祐正(宗教)高畠寛我(梵語)

三月二十日午後二時葛野郡太秦村廣隆寺客殿に集合、殿會、寶物(殊に國寶其大部分を占む)を拜觀し、佛教美術の精華を讃嘆し、午後四時同寺を辭し、嵐山電車に身を托し天龍寺に詣で、同寺山門前にて一同記念撮影を終へ、渡月橋畔を春風に嬉られて下り、會場に到着、午後五時半より清宴に移る先づ委員の諸先生に對する謝恩の辭、新卒業生諸君に對する祝賀送別の挨拶の辭に次いで、木村善堯君新卒業生一同を代表して謝恩的答辭を述べらる。宴方に酣なるに當り、手島學士起ちて意味深長の七言絶句一首を吟ぜられ、然も委曲に亘りて解明の勞を執らる。一同歡を盡くして解散せしは午後九時。本日の來會者は

松本教授、榊教授、木村善堯、藤井祐正、高畠寛我の三卒業生、本田、二十二、手島、島越、原の諸學士。甲斐、岡本、梶原等の諸學生、合計拾參名。

同會、十一月例會

十一月廿六日(火)午後六時、第六教室に於て開會、

一、世親の佛性論に就いて、　甲斐實行

一、タナラトハの印度佛教史中、大天の五事論に就いて、　寺本講師

來會者、松本教授、寺本講師、藤井(默慧)、猪股、本田、二十二、島越、宮城、鹽崎、原の諸學士。甲斐、禿、杲、山田、堀田、塚本、岡本等の諸學生、其他龍谷、大谷等の諸大學生數名。

同會大正十一年二月例會、

二月二十　日(火)午後六時、第六教室に於て開會、

一、僧團と戒律、　杲、敬照君、

一、他力教の基礎、　禿、丁信君、

來會者、松本教授、齋藤講師、島越、宮城、鹽崎、原の各學士。禿、杲、甲斐、千葉、岡本等の學生諸彦。

同會十一年三月例會兼謝恩會、新卒業生送別會、

本年度卒業生

禿了信、(印哲)、杲敬照(印哲)、甲斐實行(印哲)、藤田弘純(印哲)、本田茂正(宗教)、佐保田鶴治(宗教)、河村巖(宗教)、明石嘉連(梵語)山口益(梵語)

三月二十日(月)午後二時、洛北紫野大德寺塔頭大仙院に集合、二時半より同寺及其塔頭諸寺院の殿堂、寶物、茶室、

庭園等を拜觀し、午後四時五十分同寺敕使門を背景として一同記念撮影を成し終つて、五時より大仙院にて晩餐に移り、名物一休料理に一同舌鼓を打てり、

先づ委員の諸先生に對する謝恩の辭、新卒業生諸君に對する祝賀送別の辭に次いで、甲斐實行君新卒業生一同を代表して謝恩的答辭を述べらる。午後八時一同談笑裡に歡極つて散會す。

當日の來會者、松本教授、日野講師、禿了信、呆敬照、甲斐實行、佐保田鶴治、明石惠達等の新卒業生諸彥、本田、宮城、鳥越、鹽崎、藤井(祐正)原等の諸學士、後藤亮一君及び在學生岡本三吾君等拾五名。

東京帝國大學印度宗教學會九月例會 最近文學博士の學位を得られたる荻原雲來氏の祝賀會を兼ね、同氏の講演會を左記の如く開催す。

日時、九月二十七日(水)午後五時半、
場所、帝大第一學生控所(階下)
講演、觀世音に就いて、荻原氏、

當日の出席者左の如し。高楠、村上、荻原、常盤、木村、宇井、松村、諸先生、鈴木宗、補永、池田、神林、槙木、宮坂、栗原、藤本、干潟、渡邊、石川、金山、金倉、三輪、山田、義田、齋藤、中野、富本、小野島、藤田、小出、大友、等卒業生、竹內、久野、田崎、松濤、松浦。等諸學生。

荻原先生の講演の外、諸先生、先輩等の談ありて活氣を帶ぶ、散會せしは九時半なりき。

同十月例會 東北帝國大學教授に內定して、近く留學の途に上らるる鈴木宗忠博士の送別會を兼ね、神林隆淨學士の講演會を左の如く開催す、

日時、十月二十六日(木)午後五時半より
場所、帝大山上御殿、
講演、密教の法身觀、神林博士、

神林氏の講演の後、鈴木氏の感想談あり。來會者左の如し

姉崎、石橋、長井、宇井、荻原、諸先生、鈴木、池田、補永、寺澤、藤本、金山、石川、西川、三輪、中野、齋藤、山本、藤田、宮本、小出、久野、松濤、濱口、池田、上野、濱野、等諸氏

同十一月例會 文部省にて宗教調査に從事せらるゝ本會員相原一郎介學士に講演を依頼し、本月例會を左記の如く開催す

日時、二十七日(月)午後六時より。
場所、帝大山上御殿。
講演、基督教の組織及び政治に就いて。相原氏。

當日の出席者、村上、木村、長井、佐野諸先生。金山、小出、田崎、松浦、坂本、等にて眞面目なる會合なりき、散會せしは九時。

新刊紹介

文學博士木村泰賢著「阿毘達磨論成立の經過に關する研究」

阿毘曇論書、卽、小乘論部の研究は佛教學上最面倒で、且つ面白くなく、然かもその結果が、人生問題の解決とか、安心の確立とか謂ふような實際宗教上の問題に對してはその價値の少いものであるが爲、この方面の研究は何人も大抵嫌がるものである。然しまた學としての佛教學をやるものは何人も是非一度は通らなければならぬ關門である。從て古來佛教學者と謂はるゝ程の人は、多少なりともこの方面の學修を怠らなかつたのである。就中、素人でもその名位は知つて居る筈の、かの倶舍論の如きは「唯識三年倶舍八年」など言つて、盛に支那日本の學者によつて研究されたものである。然し現代の學術研究の方法を以て、梵、巴、藏、漢と所有材料を集めて、徹底的に批評研究されたものをあまり聞かないのは、だゞに予の寡聞なるが爲のみではなからう。否、有るにしても、少くも或程度迄まとめて之を公にしたものは蓋し木村博士の本論文を以てその嚆矢とするか

「本書は著者が、原始佛教より大乘佛教に至る中間物としての小乘各派の思想研究の爲、その基礎事業としての阿毘達磨論書成立の經過に關する攻究を積まれ、これを英國留學中、大正九年九月脱稿、直に當地へ送附され、その結果翌十年博士號を得られ、かくして今回公刊されたものである。

本書集むる所五篇、何れも或程度迄は獨立の、然かも阿毘達磨論書成立の經過に關する研究といふ點に於ては互に相連絡せる論文である。第一篇は阿毘達磨論書の成立に關する一般論。第二篇は漢譯舍利弗阿毘曇論と巴利文 Vibhanga 及、Puggala-paññatti との關係。第三篇は施設足論に關する研究。第四篇は大毘婆沙論結集の因緣に就て。第五篇は倶舍論の述作とその參考書となれる諸論書に關する研究である。その標題の示す如く、何れも極めて專門的のもので、然かも研究結果の報告である以上、從來の著者の公にした他の書（印度六派哲學 原始佛教思想論等）に比しては確に素人泣かせのものである。然 それだけ學問的見地からすれば贅文の無い緊張する論文であつて、到る處新主張新發見を以て充たされたる所、學術研究書といふ點からすれば、蓋し最後に出たものだけあつて最勝のものであらう。然かもかくの如き專門的難問を穿鑿論述するに當つても、著者のいつもながらの達意的な明快な行文と、及その行論の男性的な線の太い所とは容易に他人の追隨

を許さゞる趣がある。これが爲、この方面には全く無知な素人でも、終始快哉を叫びつゝ一氣に讀了することが出來るのである。

その公刊に際しての追記に於て、著者自ら「讀者の忌憚なき批評を……望む」とある以上、讀者としての予は出來得る限り嚴密なる批評を爲すべき義務がある。然し、その卷頭の序文にある通り本來「先覺者の批判を仰がん爲」のものである以上、我々後輩者は到底批評する資格がないのである、否實の所、有りていに言へばやつて見ようと思つたけれども出來ないのである。たゞ聊以下內容に亘る紹介をするに止めよう。

第一篇は三章に分れ、第一章阿毘達磨の起源と其成立、第二章阿毘達磨文學發達の大要、第三章論書に於ける問題の取扱方の變遷、となつて居る。つまり全般に對する大綱論であつて、研究論文といふよりはむしろ著者自らも明言して居らるゝ通り、「教案であつたものを整理した」ものである。この篇は他の四篇に比しては、著者自らも多少不備の感不滿の念を以て顧みて居らるゝことゝ思ふが、些細の點になれば幾分議論の餘地もあらうし、また明に過失なりと思はるゝ點もないではないが然しそれ等も大綱論なるものゝ性質上止むを得ない所とせねばならぬ。而して兎に角數百年に亘つて紛然雜然と輩出した種々の論書を史的批評的に系統立てた點、殊に、論書に於ける題目の取扱方の變遷の條（五三頁以下）に於て、それが修養問題より事實問題へと進めりとし、また論書に於ける問題の分擔の條（六二頁以下）に於て、初期＝不完全なる總合、中期＝部分的精細、後期＝完全總合の順序とせられたるが如きは、先覺者から見れば言ふべきを言はれたに過ぎないかも知れぬが後學者にとりては研究方針を指示されたものとして感謝せざるを得ない。

第二篇亦三章に分れ、前二章に於ては北方所傳の舍利弗阿毘曇論と、南方所傳の Vibhaṅga 及、Puggala-paññatti とが、もと同一原型の阿毘達磨論書から分化發達したものなることを證明し、從來南北兩傳の小乘論部間には、關係皆無とせられて居た學說を覆すに至つた重要な論文である、第三章にては進んで舍利弗阿毘曇論の法相的特質を明にし、この點に於ても一創見を出だして居るが、猶傍ら所謂分別論者との關係をも論じて、從來目支の學者をしてかの幽靈の如き分別論者なるものの正體を把むに向つて、一道の燈火を點ぜられた感がある。猶本篇七四頁に於て「印刷に際しての追記」は著者の正直振りを、一一六頁に於て「舍利弗阿毘曇論の可笑譯說」を擧げたるは著者の茶目振りを發揮したものとしてまた一種一味がある。

「第三篇施設足論（Prajñapti-śāstra）の考證亦三章に分れ、

第一章問題の所在とその研究法、第二章　現在施設論と大毘婆沙論　引用句との合否に關する表、第三章　上表に基いての結論、となつて居るが、その結論は、漢譯施設論と有部の所謂施設足論との關係を考證し、進んで全體としての施設論の原形に迄論及せられたものであつて、これ又、從來學者間に問題となつて居りつゝ猶常に煙霧の裏に蔽はれて居つた謎に、解決の鍵を與へられたものである。その財料中には著者自も告白して居らるゝ通り、尙不充分の所あるにもかゝはらず、その達觀による結論に對しては、今後斯學の研究の進むにつれて益々之を確め得ることゝならう。それにしてもこの方面、特にこの場合西藏論部の研究の、吾國學界に於て今猶幼稚であり、著者に對して充分の財料を提供し得ざりしことを悔いねばならぬ。

第四篇は大毘婆沙結集の因緣に就いて、從來信ぜられてゐた眞諦、玄奘の論を排し、婆沙篇集と迦膩色迦王との關係を否定し、（二〇七頁以下）かの有名なる婆沙四大論師をも結集者としては之を認めざるに至りし點（二一八頁以下）の如き、蓋し荀安の學界に一波紋を起さずんば止まざるの投石であらう。

第五篇は俱舍論述作の因緣及その參考書に就いての論なるが、本論文はそれ自身に於ても從來の說を破棄した新論であるがその他の問題に關係する點に於てまた學界一大波亂を起すべきものである。

第一章——大毘婆沙文學に於ける俱舍論の地位及其述作の傳說に關する疑、本章は著者が本論を草するに至りたる出發點であつて、俱舍論述作の因緣に關して、眞諦、玄奘等の傳に疑を抱き、何等か他に解決の道なきかを索めて、遂に一案を得たものである。蓋し古傳に疑を抱くは少しく批評眼を持つた者は皆然りであるが、その解決の方法に至つては人によつて自ら異るべく、著者はこの點に於てたとひ林常の暗示があつたにせよ、自ら、一獨創の見地を拓いたものである。從て本論文の最重要な點は第一章の結論、卽、俱舍論述作の經過に對する論斷である、卽ち曰く「俱舍論述作の直接種本は法救の雜阿毘曇心論なり」と。蓋しこの說を認めるか否かで俱舍論自身の問題はもとより、古世親を認むるか否かの問題、從つて從來世界の學界に於て今猶解決されずに殘つて居る所の所謂世親年代に關して全印度文明史上少くも四五十年の變動を起す重大問題である。されば著者は第二章以下に於て最力を入れてこの點を詳論して居る。卽、第二章——俱舍論述作の參考書として阿毘曇心論より雜阿毘曇心論まで。

第一節——法勝の阿毘曇心論に就いて。第二節——優波扇多釋阿毘曇心論經。第三節——法救の雜阿毗曇心論

第三章——雜阿毘曇心論と俱舍論。第一節——雜心論を利用

するに當りての世親の用意。第二節―前節に對する證明（兩論類似の表示）。第三節結論。

著者は以上の諸項に於て精細に終始批評的態度を持して論を進めて居るが、然し猶或は議論の餘地があるかも知れん。兎に角學界の諸君は先以て本著を精讀し他の方面よりの研究と相俟つて長く世界の學界の問題となつて居り、今また著者によつて新なる展開を試みられし本問題の解決に向つて協力討究すべき義務があるであらう。

（丙午出版社發行、菊版三二四頁、附錄に親切なる漢語及梵巴語の索引あり、定價三圓五十錢、校正も從來の同著者の諸書に比してはよほど嚴密である、たゞ體裁だけは明治卅年頃のものそのまゝであるのを遺憾とす。）

〔十一年十一月廿二日、于潟〕

津田敬武著「日本民族思想の研究」

著者津田氏の人となりと、その學識とについては、本誌の讀者には特に紹介する必要はない。本篇は著者が、日本民族の民族的自覺とその意識內容とを諸方面から照明せうとした研究論文を集めたものである。「民族思想」といふ範圍は、明瞭な樣で、而かも的確には捕へ難い點が多く、本書もその內容を概念的に定めてゐない。此は學術的には寧ろ正當、或は少くとも安全の方法であつて、著者は、神道祭祀、祓禊等神道の側にも、又佛教の回向事業や寫經や盂蘭盆會にも、又南北朝頃に多かつた起請文にも、又愛國思想の變遷にも、各々民族思想の發露と共に發達や、變遷を示し、寧ろ客觀的にその標本を示す方法を執つてゐる。「民族思想」に關する著者の熱情は、處々に發露はしてゐるが、多くの宣傳的言論と類を異にしてゐる。此民族の生活から湧き出、又はそれに密着し結合して、民族の自覺ある觀念や風俗が、如何に諸方面に現れて來たかといふことを、客觀的事實の中に發見せうとするのが本書の目的であると見られる。著者は、此の目的から見れば、少々細目に亘り過ぎた點にも入つて居られるが、此は歷史的研究として見るべく、決して咎むべきことではない。本書は、その叙述の點を說明する爲に數多の挿畫を入れ、中には珍品の寫眞もあり、學術的にも頗る有益の材料を包有してゐる。（大正十一年、大鐙閣發行）

ウイリアムジエームズ著「宗教經驗の諸相」

（比屋根安氏譯）

本書は、全譯であつて、抄譯でない。細かな註に至るまで、少しも漏らさずに譯してある。ジエームズの文體を尊重して逐字譯とし、重なる人の名は太い活字で表して、原著者が個人の宗教を力說した點に留意し、西洋人の名の下に

は漢文字が入れてある。イタリック活字、フランス、ドイツ、ラテン語、或は梵語等で書かれたものには、傍點を施して、それを示し、日本人に馴染あるものは、漢譯に基かせ、その必要な個所には、註が加へてある。譯者が約一ヶ年半の日子を費して、此の大册(七一九頁)を譯了されたことは、同氏のために慶賀する處であり。學界のために嬉しいことである。(聲醒社發行。四圓五十錢)

舊約外典(世界聖典全集)

杉浦貞二郎氏の譯になつたものである。譯者も云ふ如く、「原書は有名なセッチンドルフの七十士譯の舊約聖書と、スウイート博士希臘語舊約聖書とである。元來外典諸書の原著は、その大多數は希臘語で書かれたものでない、從つて七十士譯の希臘本は、精確に原著を代表したものとの保證出來ない、故に譯者はこれ等のみに默從せず叙利亞語、拉甸語の譯方を參考して、最も正しく原書に近いと思はるゝものを本書に提供する」と云ふ抱負で書かれて居る。卷尾には外典概論として四六頁の附錄が附し、初めて此種の書を手にする者にも便利である。

舊約全書解題(世界聖典全集)

第一篇を九部に分ち、第一部モーセの五書、第二部、ヨシュヤ記、第三部、士師記　第四部、サムエル前後書、第五部、列王紀略、第六部、歴王志略、第七部、エズラ書並にネヘミヤ記、第八部、ルツ記、第九部、エステル記。

第二篇を四部に分ち、第一部をエザヤ書、第二部をエレミヤ記、第三部をエゼキエル書、第四部を「十二豫言者」の書とし。

第三篇を上下に分ち、上を「知慧のふみ」とし、下を「詩書」とし、

第四篇を附錄として第一、イスラエル民族とその歴史概要。第二、イスラエル國民史思想史上のサフーム、ハバククの位置。第三、創世記に於ける天地創造譯の研究とし、三二〇頁の書物である、此方面の研究者としては第一人者たる石橋智信氏の著になつたものである。

ペルシャ文學史考

荒木茂氏著

本書は著者が、過去六ヶ年間コロンビア大學に遊びて、主として、ジャクソン博士の指導の許に、研鑽せられたペルシャ文學研究の成果を、綱要的に纏め上げたものである。

「ペルシャは言語から言つても梵語とその起源を一にすると言はれ、その宗教にも古代印度と多くの共通點を有する

ことは、皆人の知る所であり、印度學又は宗教學の研究者には關係の深い土地であるにも係らず、我學界には今日までその專門の研究家が殆と鮮く、參考書の如きも良書を缺ぎ、遺憾な點が少く無かつたが、今や此種の本書が現はれて、その缺陷を幾分たりとも補ひ得るに至つたことは、欣幸の事と思ふ。

本書は主として文學文字等の變遷發達を取扱つたものであるから、勿論古代の文學が宗教と不可分離の關係にある以上その點にも觸れてはゐるが、思想や宗教の問題を主として知り度いと思ふ者には多少物足りなく思はれぬ點が無いではない。もとより、これは此種の要求を以て望む者の方が無理とも考へられるが、何れにしても波斯の宗教に幾分關心の者には、單にその文學史として本書の提供する、豫備知識丈でも、十分に心得て置く事の必要なるは論ずる迄もない。この意味に於て本書は將來とも宗教學印度學研究者の良い參考書たり得るであらう。著者は「玆には大略を述ぶる」に止り、尙「他日部分的研究の準備とする考である」と言つてゐるから、個々の部分に關しては近き將來に於て、その獨自の研究を發表せらるゝことゝ思ふ。本國の全體に渉て措辭極めて妥當であり、批判も至て穩健で、獨斷を出來る丈避けてゐらるゝ態度は、著者人格の反映とも見られて奥ゆかしい。內容は

一、緒論
二、アカメニアン朝の遺跡
三、アヴエスタン文學の沿革
四、パーラヴイー文學の內容
五、近世ペルシヤ語の諸作

より成り附錄に、年代表、參考書目錄等を附し、全體は四六版で約三百頁程の量がある。（岩波書店發行）

『ダスグプタ著印度哲學史』

A History of Indian Philosophy, by Surendranath Dasgupta, M. A., Ph. D. Vol 1. Cambridge University Press, 1922.

著者はベンゴル州チタゴング官立學校梵語の教授で、同時にケンブリツヂ大學のベンゴール語の講師を兼ねる人。本書は曾て『印度人自ら印度の哲學史を書く可きである』といふ言葉に勵まされ、且又、從來歐洲人によりて印度は專ら、言語學的或は文學的等には熱心に研究せられたけれども、單獨に思想の發達のみを取扱ふといふ哲學史の見地から之を發見した學者の乏しきを慨し、印度古來の思想が單にありしまゝとして研究の價値あるのみならず、又その成果は直に今日の哲學問題解決に寄與すべき點の多きを信じて、爰に述作せられたものが本書である。印度の所謂哲

學を論究した著述は歐米の學者に必しも乏しくは無いが、本著者の如く、哲學に限りて全般に渉り、然も『印度哲學史』と明に命名して出版せられたものは、本書を以て嚆矢とするものゝやうである。惟ふに、本著者自らが第四章の冒頭に於て特に一節を設けて論じてゐるやうに『如何なる意味に於て印度哲學史は可能なりや』といふ問題は、――著者自身は極めて單純に之を處理して特に方法論上傾聽すべき意見を發表してゐないにかゝはらず、少くとも斯學に携る者は、此點に、明に論及すると否とは別としても、何等かの獨自の解決を付けて出發するのでなければ『印度哲學史』の如きを論ずは、少くとも今日斯學の研究の成果の要件から丈では、徒に羊頭を懸けて狗肉を嚙ぐの譏を免れ得ないでもあらう。歐米の印度學の眞の專問家に今日迄かゝる題目の述作を缺ぐのは、單にグプタの言ふ理由のみではなく、かつ又その價値を低く見積るといふ意味許ではなく以上に言ふやうな方法論上の疑問に就ての學的良心の鋭敏な爲とも解し得らるゝのである。

何れにしても、本書は倘如是見地から論ぜらる可き點を含んでゐると思はれるが、內容の配例は、單純に各派を一纏めに全體に論じ終るといふ方法を採つてゐる。卽第一章緒論　第二章吠陀ブラーハマナ及その哲學、第三章古ウパニシヤツトとし、これらは既に在來多く論ぜられたれば精細に說かずとし、第四章に於て印度哲學大系の概觀としてその共通的特徵に注意し、第五章佛敎哲學に於ては材料の性質上獨斷を避けたる結果、結論の漠然たるに失せざりしやを畏れ、第六章に於て耆那の哲學を說き、第七章に至りてはパタンヂヤリの瑜伽哲學は寧ろ一種の僧侶と見らるべくカピラのそれと相並ぶべきものなりとの見地より、ガピラ及パタンヂヤリの僧侶として論じ、第八章には正理派と勝論とを論じ第九章聲論哲學、第十章に以上諸派の哲學說の歸結として吠檀多の商羯羅派を論じてゐる。

本書は倘この『印度哲學史』の前半が印刷せられたに止り。後半に於ては主として印度敎に於る思想の發達を論ずる豫定らしいから、全體としての批評はその際に讓らねばならぬか、何れにしても著者か材料を自由に驅使し得たといふ點から丈言つても、確に本書は一特色を有する良書と推し得るであらう。そして倘此天賦の利器は畏らく比較的研究の行屆かぬ後半部に於て吾人を一層啓發する點の多いことは、今日からても期待し得らるゝ所である。本書は菊版で約五百頁の大册である。

『ケムブリッヂ印度歷史』第一卷

『古代印度』

The Cambridge History of India, volume I.

Ancient India edited by E. J. Rapson, in six volumes.

『ケムブリッヂ印度歴史』は六卷を以て印度に關する歴史的諸研究を網羅し、印度歴史の大集成を目圖せるに物して一九二〇年に出版せられたるヴインセント・エ・スミスの『オツクスフオード印度歴史』に對比さるゝものである。今紹介する『古代印度』は其第一卷として出版せられたもので已に一九一四に Ancient India を世に問へるラプソン氏の編輯にかゝはる。序言によれば一九一三年に着手せられ一四年には其大半は活字に組まれたものであるが戰爭勃發して其完成は一八年迄中斷せられたのである。加るに二〇年には前記のオツクスフオードの出版せるあり、遂に又書き改めが企てられ二二年に入りて漸く世に現はれたのである。その取扱へる範圍は古代より紀元第一世紀の中葉に及んでおるオツクスフオードの出版と異り、各時代に亘り各材題により各々その道の研究家の筆を煩はせるものなれば、重復、反覆、交錯の憂は免れずとするも蓋だ權威ある印度歴史大集成の實を擧げ得る。蓋しその完成は學界に貢獻する所大であろう。内容、廿六章附錄六項七三六頁。

『第一章『印度大陸』Sir Halford J. Mackinder, M. A., M. P., Reader in Geography in the University of London.

『第二章、A『人民及言語』B『歴史の起源』

E. J. Rapson, M. A., Professor of Sanskrit in the University of Cambridge, and Fellow of St. John's College.

『第三章『アリアン民族』P. Giles, Litt. D., Master of Emmanuel College, and Reader in Comparative Philology in the University fo Cambridge.

『第四章『リグ吠陀時代』A. Berriedale Keith, D. C. L., D. Litt., Regius Professor of Sanskrit and Comparative Philology in the Uuiversity of Edinburgh.

『第五章『後サムヒター時代即、梵書（ブラーハマナー）、森林書（アーラヌヤカ）、奥義書（ウパニシヤツト）時代』A. Berriedale Keith.

『第六章『者那教の歴史』Jarl Charpentier, Ph. D., University of Upsala.

『第七章『佛教初期の歴史』T. W. RhysDavids, LL. D., Ph. D., D. Sc., formerly Profesor of Pali and Buddhist Literature at University College, London, and Professor of Comparative Religion in the Universsity of Manchester.

『第八章『初期佛典より見たる印度の經濟的情況』Mrs. C. A. F. Rhys Davids, M. A., D. Litt., Fellow of University College, London.

第九章『經書(スートラ)、舒事詩(エピック)、法典時代(ダルマ・スートラ)』E. Washburn Hopkins Ph. D., LL. D., Professor of Sanskrit and Comparative Philology in Yale Univeristy.

第十章『經書(スートラ)に現はれたる印度の家庭生活及社會的慣習』E. Washburn Hopkins.

第十一章『舒事詩(エピック)に現はれたる君主及人民』E. Washburn. Hopkins.

第十二章 法律の發達と法律制度法典) E. Washburn Hopkins.

第十三章『神話』E. J. Rapson.

第十四章『アレキサンダー侵入に至る迄の北部印度に於けるペルシヤの版圖』A. V. Williams Jackson, Ph. D., LL. D., Professor of Indo-Iranian Languages in Columbia University.

附『印度に於けるペルシヤの古錢』Dr. George Macdonald.

第十五章『アレキサンダー大王』E. R. Bevan. M. A., Hon. Fellow of New College, Oxford.

附『印度に於けるギリシヤの古錢』Dr. George Macdonald.

第十六章『古ギリシヤ及ラテン文學にあらはれたる印度』E. R. Bevan.

第十七章『シリア、バクトリアパルチヤに於けるギリシヤ領土』George Macdonald, C. B., LL.D., F. B. A., First Assistant Secretary Scottish Education Department.

第十八章 孔雀(マウリヤ)帝國の建設者、チヤンドラグプタ』F. W. Thomas, M. A., Ph. D., Librarian of the India Office.

第十九章『孔雀(マウリヤ)帝國に於ける政治及社會組織』F. W. Thomas

第廿章『佛教の外護者、阿育大王』F. W. Thomas.

第廿一章『孔雀(マウリヤ)帝國時代後の印度土俗諸國 E. J. Rapson.

第廿二章『アレキサンダー大王の後繼者』E. J. Rapson.

第廿三章『スキーテン族及パルチヤ族の印度侵入』E. J. Rapson.

第廿四章『南印度の古代史』L. D. Barnett, M. A., Litt. D. Keeper of the Department of Oriental Printed Books and Mss. in the British Museum.

第廿五章『セーロン島の古代史』L. D. Barnett.

第廿六章『古代印度に於ける遺物』Sir. J. H. Marshall, K. C. I. E., Litt. D., Director General of Archaeology in India.

略字略號表・書籍解題・年代表・索引・寫眞三十四枚・地圖六枚。

マルセル・グラネ著『支那人の宗教』

Marcel Granet, La religion des Chinois (Paris 1922)

本書は『科學と文明』Science et Cibilisation) といふ叢書の一篇で、その叢書は、今までの分は、多くは理料關係のものであつたが、本篇は『支那人の宗教』で、特に文化史と社會學との立物で、之を叙した點に於て、今まで他で出版になつた支那研究書の中で一特色を有して居る。著者グラネ氏は支那學者として優に、一家をなして居る外にデュルケイム派の社會學說を基本にして、支那を研究したのであるから、見地に於て頗る新面目を呈し支那の宗教を組織立つた典籍や學說以外、更に人民の生活と信仰とに卽して研究して居る。

そこで第一章『百姓の宗教』では、人民の宗教信仰、人民特に農村の生活、村落の祭事、神話俗說を研究し古今の材料によつて人民の活きた宗教を明にし、且つ又それが組織ある學說の根底になつて居る點を示してある。

第二章『封建の宗教』は、封建諸侯、士大夫の禮典宗教を研究し、天の祭祀、農事祭典、祖先崇拜などに亘り、且つ又その方から生じた神話をも扱つてある。

第三章は『朝廷の宗教』で、儒者の組織した宗教禮典、哲學思想、道德思想や教訓を研究し、人民の宗教に對する『公式の宗教』を叙してある。

第四章『宗教の刷新』は道教と佛教とが、宗教觀念に於て『公式宗教』の缺陷を補つた點を示し、結論には『現代支那に於ける宗教感情』を叙して、支那人の宗教が教理や信條よりも祭事禮典を重んじ、而してそれが皆現在の生活與味に密着してゐる事を指摘してある。

されば、本書は特に支那人の宗教に關しての叙說である以上に、人民の宗教を如何に扱つて見るかといふ方面に於ける一特色あ 著書で、多く書物によつてのみ支那宗教を見る日本の學者には好箇の刺戟である。

ゴードフロア・ドモンビーヌ著『回教の制度組織』

Gaudefroy-Demombynes, Les institutions mu sulmanes (Paris, 1921)

此は『一般文化』(Culture générale) といふ叢書の一冊で、回教を宗教としてのみならず、回教國民の生活全體と關聯して觀察したものである。卽ち教祖の人となりや、その教理の外に、特に回教國の法制と宗教との聯絡、政治の狀態、人

民生活との關係などを社會的にも觀察したものである。何れの宗教も、社會生活との聯絡を併せ考へる必のあるは勿論であるが、回教國は西洋の中世と同じく、宗教と法制と生活との一つになつた社會を作り、そこにその宗教の特色もあり又現在及將來の世界に對する意義もある譯である。本書はそれ等の點を平明に叙したものとして、恰も回教問題が世界の大勢に重大の意義を呈せうとしてゐる今日誠に恰好の手引である。

ムーン氏『フランスに於ける勞働問題と社會公教運動』

Parker J. Moon, The Labor Problem and the Social Catholic Movement in France. New York, 1921)

ロマ公教會の範圍での社會運動特に、勞働問題處分は法王レオ十三世以來、頗る活氣を呈し、フランスやイスパニアでは、社會運動中の一大勢力として、種々の組織設備をも整へて居る。本書は、十九世紀の始以來、フランスに勞働問題の起ると共に、それが產業組織、教會政策、政治問題の三者相合して、公教主義の社會運動が今日まで進むで來た跡を、客觀的に叙したものである。その內容を紹介するのは卽ちその歷史を語ることになるから、玆には之を略するが、本書は同運動のあらゆる方面に互り、一々原本材料（著書刊行物の外に演說筆記や宣傳書類や組織規約等）を示して、運動の變遷、主張の要點、實行の方法等を隈なく叙してある。フランスに於ける同運動を知る爲のみならず研究方法と叙述と體裁とに於て、他の同樣の運動を研究するものにとつて好模範を示したといつてよろしい。

カレン著『シオン運動と世界の政治』

Horace M. Kallen, Zionism and World Politics (New York, 1921)

ジエームス門下の俊才で、美學者としても社會學者としても新見地の提唱で重きを置かれてゐる著者カレン氏は、その血統に於てユダヤ種である。その人がユダヤ民族の新國民運動といふべきシオン運動を叙して。その間にユダヤ民族の理想努力の跡を明にしたものである。先ユダヤ民族の宗教的理想とその民族的憧憬とから說き起し、ヨーロッパでそれが段々に社會的運動となり、それから米國に入つて、一定の目標あるシオン建設運動となつた跡を明にし、而して後半は、世界大戰と戰後の今日に至るまで、それと政治外交との結合や相互影響を明にしてある、而してサンレモの條約で。パレステナの土地をユダヤ民族の國土として、英國委任統治の下に、將來の獨立國民の基礎を据えたのは、世界の歷史に於ける一大事件であると共に、ユダヤ

民族の實行能力に對する一大試驗たる事を明にしてある。著者は、ユダヤ國民運動が世俗的運動として、政治や經濟を主要の要素とすることを力說してゐるが又心理的には宗教的要素の重大なるを忘れてならぬ點を主張してゐる。日本には。ユダヤ民族に關する無知の外に、驚くべき讒誣の流說を傳播するものがある。シオン運動の社會的、心理的又政治的宗教的意義を研究せずして、無知と迷信とに滿足する人々は本書を讀むで眼をさますべきである。

加藤文雄氏の近信

姉崎先生に宛てた加藤文雄氏の手紙が十二月十三日に屆いたから、先生に乞ふて載せることにする、都合上省略した箇所もあることを豫め先生、加藤氏、並に讀者諸氏に謝して置く。

合掌　爾來御疎情無本意存候　愈々御健勝にて學事益々御多祥の御事と奉遙察候　小生着津已來專心研學に志し未だ何處の地も見物致さず、閑靜なる學窓にのみ深き執着を感じ居候、幸に色心共に健在に候間乍憚御安慮被下度候、御存知の通り四望森閑なる學都、今の我身にはこよなき天地と覺え申候、緣陰已に過ぎて木枯の寒きに吹き落つる木の葉又なくあはれを催す折柄心界の靜けさはいよ〳〵深きを加へ申候、多年遠かりたる洋書も今は無二の友と相成り日夜汲々として日月の流るゝも忘れ居候、御紹介を辱うせるカーペンター教授、ことの外御親切に指導を賜り何かと御指圖を仰き居り候、大學の一員として正式のコースを取るべき希望は有之候處、六月〆切との事にて其意を得ず、されど幸にマンチエスター・カレッヂに深き關係を結ぶ事を得、主として同學に於て聽講致す事に決定仕候、一般カレッヂの講義は凡て開放致居候へば何れも聽講自由に候へ共、今は主としてマンチエスターのみに限定し、學長ジャック博士以下諸教授の會下に參じ居候、小生研究方針としては先づ基督教より着手するに決心し、殊に福音書の基本的批判的研究より着手することに致候、其の目的の爲め當分は希臘原典の研究に沒頭する考に候、右一渡り要領を得候上にて近世に移り度存念に有之候、但しこの間不斷に佛教思想殊に日蓮聖人の教義信仰と比較研究する事を忘れ間敷、以て幾分たりとも比較宗教學上に貢獻し得者幸なりと存候。

此の大學を通じて本年度の講義にして、宗教及哲學に關係せる分は八分通り基督教に關するものに候　一般宗教又は哲學の講義は僅かに左の數種に不過候。

十月十六日開講

1) Introduction to the philosophy of Religion by Prof. Webb. (in the Examination Schools.)

2) The philosophy of Theism.
by Dr. Sellie. (in Mansfield College.)

3) Moral and Spiritual Value.
by the Principal Jacks.(in Manchester College.)

4) General Psychology; Special Topics in Psychology.
by Dr. WilliamBrown (in Christ Church.)

5) History of the Relation between Religson & Sciance.
by Mr. Walker. (in Compion Hall.)

6) The Doctrine of Life after Death in Early Indian and Iranian Theology.
by Prof. Carpenter. (in Manchester Cyllege.)

7) Three Great Religions.
by Dr. Adaws Brown. (in Manchester College.)

8) Mind and Body.
by Dr. William Brown.
(in the Examination Schools.)

9) Metaphycic.
by Prof. J. A. Smith. (,,)

10) The Judgment.
by Prof. H. H. Joahim. (in New College.)

11) History of the Theory of Knowledge. (Descartes to Kant.)
by Mr. H. A. Princhard. (in Prinity College.)

12) Benedetts Croce.
by Mr. H. J. Paton. (in Ruceis College.)

13) Introduction Moral Philosophy.
by Mr.W D. Ross. (in Oriel College.)

14) Moral Philosophy. (Butler, Hume, Kant.)
by Mr. E. F. Carritt. (in University College.)

15) Moral Philosophy.
by Mr. R. G. Collingwood. (in Tembroke.)

16) Political Philosophy
by Mr. W. A. Pickard-Cambridge.
(in Worcester.)

其他 Classic の方面にて Plato, Aristotle 等を讀み居り候には勿論に候。右の通り比較宗教學としてはマンチェスターに於けるカーペンター教授(六)及びブラウン博士(七)の兩講義有之耳に候。ブラウン博士は米國ニューヨーク市の Union Theological Seminary の教授にて特に本學年末に招聘せられたるは御推察の通りに候。

佛教に關しては特に講義も無之候　唯東洋語學中に Prof. J. Morison; Sanskrit. 有之候のみに候。文典及 Lanman's Reader & Manu; Book II. を一週五時間講讀致居候。

小生はマンチエスター以外聽講せず、同學に於ては左の講席に侍し居り候。

1) The Principal Jacks: Moral & Spiritual Value.
2) Prof. E. Carpenter: The Doctrine of Life after Death.
3) Dr. H. Gow: The Synoptic Gospels.
4) Mr. D. C. Simpson: Introduction to the O. T.
5) Mr. Holt: History of Christianity.
6) Dr. A. Brown: Three Great Religions.

マンチエスターの寄宿滿員の爲め入舍不可能に候へ共、殆んど同學正式の學生同樣ににに聽講致居候、別に英佛兩國語の稽古も致し居候或は次の學期より入舍相叶ふべき歟とも存じ候、ジャク學長迄申入置候。カーペンター教授は今は外來教授として直接學務には當事せられず候。先生よりの御紹介もあり、旁〻同教授を指導の師と仰ぐ事小生の目的に合致することを信じ、何事によらず約指圖を待ち居候同教授よりも先生によろしく申され候、マンチエスターは一般大學の組織以外に立ち、從つて學位を同學にて得る事は規定せられず候、兎も角も此の地に兩三年はゆつくり落着き研究三昧に入り度存念に有之候、目下の處語學の煩は專間研究の道行を難澁ならしめ最も困難を感じ居候へ共、近き將來に於て此の難關も突破し得たくと豫期致居候、眞野兄とは遂に面晤を遂げず遺憾に存候、同兄は六月已に獨乙に走り今は伯林にありと傳聞仕候

小生の宿所の女主人は大學教授（Dr. of Civil Low.）の未亡人にて種々なる社會事業に關係し居候目下は政治運動に熱注し、ロイドヂョーヂ失脚後ボナーロー氏起つに及び保主黨生色あり、女主人は保主黨の爲め運動熱心に候、此人の紹介にて各方面に知名の士に會見するの便宜開け、專門以外見聞も廣く相成候、但し同宿者多數にて時に煩ある爲めマンチエスター入舍を布望致居候、同宿中に京大の田中（秀夫）助教授と女子高師の黑田チカ孃とありて、兩氏とも大の勤勉家、小生も兩氏の勤勉によりて大なる勵を與へられ居候、殊に田中氏は羅甸、希臘專門故其の智識を頒與せられて大に便宜を感じ感謝致居候。

尙小生の研究方針に就ての御高見御開披を賜はらば幸甚不過之候、尙研究中の着想につき參考に資し度候まま先年先生が大學に於て御講義を試みられたる「佛耶兩教比較研究」の「目錄」御惠投に與り度別して御願申入候

昨日は滯英中最初の天長節に有之候感慨いとど深きもの有之候ひければ、獨り東天を拜して靜かに唱題法圖の爲めに祈念仕候。日本に對する印象は日本を去りて益々鮮かに相成候

大日本大正十一年十月一日夜　　牛津には　加藤文雄

姉崎嘲師先生

侍曹御中

矢吹講師の近信

× ×

謹啓十一月三日杭州西湖に遊び武林、玉泉、雲林、天竺、錢塘の古蹟を訪ね、南支那の風光に接し申候。周圍三十里（支那里）、優に三日の遊覽を價するも、乘物にて巡覽六時間、鳥瞰圖を得たるに過ぎざりしを遺憾と致し候、

慶輝拜具、

× ×

謹啓、十一月七日香港に着し、ヘルメットに夏服の南國氣分を味ひ初め候。

諸兄の御健勝を祈る。

香港にて、　矢吹生

× ×

ガンディの古城趾に遊び申候、朝八時より午後六時迄、自働車にてかけ廻り、船に歸り清浴後、涼風にひたり乍ら囘顧に耽り申候、印度宗教史考の一節に『海上萬里の風を領しつつ、今尙錫崙の佛徒が、本生譚を誦するを聞く』（？）の一句ありしを想起しつつ。

セイロンより　矢吹生

× ×

謹啓、十二月三日スエズよりカイロに參り、セフアードホテルに一泊し、四日午前五時半ピラミッドの日出に人類歷史の黎明期を偲び、モスク博物館を見物し、サラセン、イタリー、イギリス風に變化し來りし埃及史を觀、興味津々たるもの有之候。

初めてサルタンがマルタ島に蒙塵せるを耳にして、埃及カイロにて　慶輝

× ×

謹啓十二月十日マルセーユに着、ノートルダームに詣で、博物館にミレやシヤヴンヌの名畫を觀、今夜リオンに向け當地出發仕候　慶輝

宗教研究　第五年　第十七號　終

大正十二年二月二十二日印刷
大正十二年二月二十五日發行

宗教研究

第五年
第十七號
奥付

編者　東京市小石川區白山御殿町百十七番地
宗教研究協會代表者　姉崎正治

發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
株式會社　博文館

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地
右代表者取締役社長　大橋進一

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇九番地
株式會社　博文館印刷所

【正價金壹圓】

不許複製

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番
株式會社　博文館